

土器溜まり 2 14 層相当

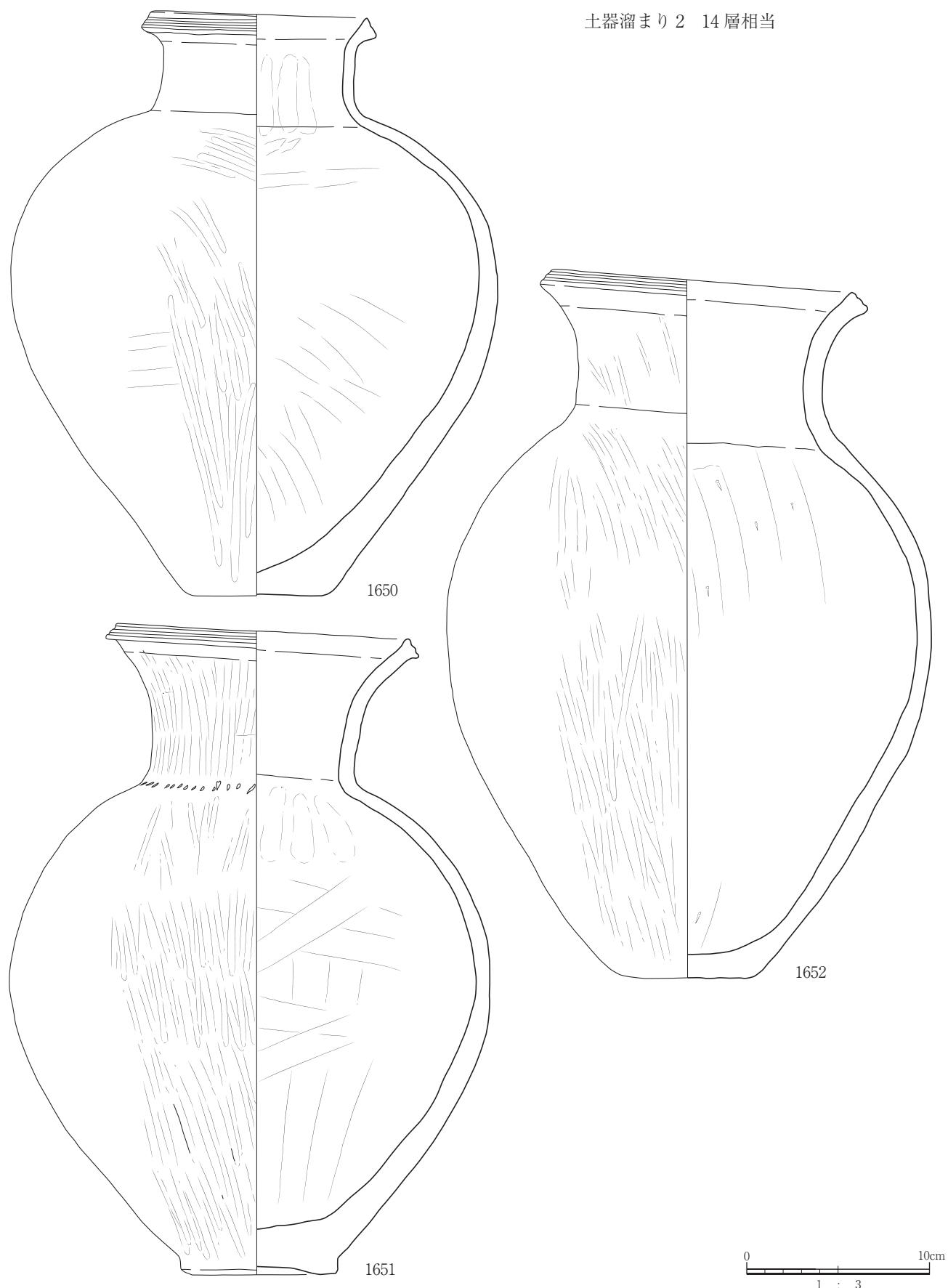


図453 SR25 出土遺物 48

土器溜まり 2 14 層相当

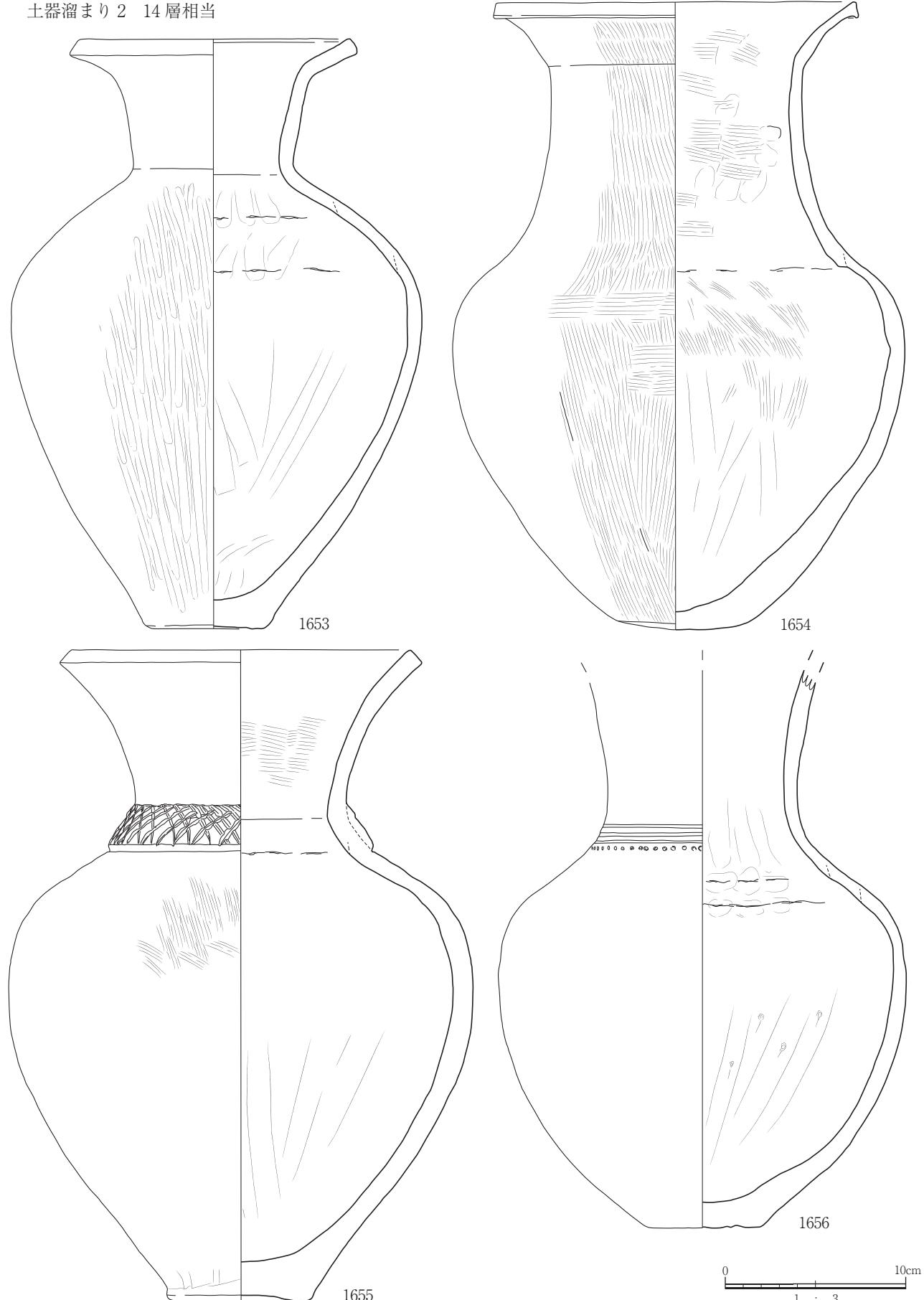


図454 SR25 出土遺物 49

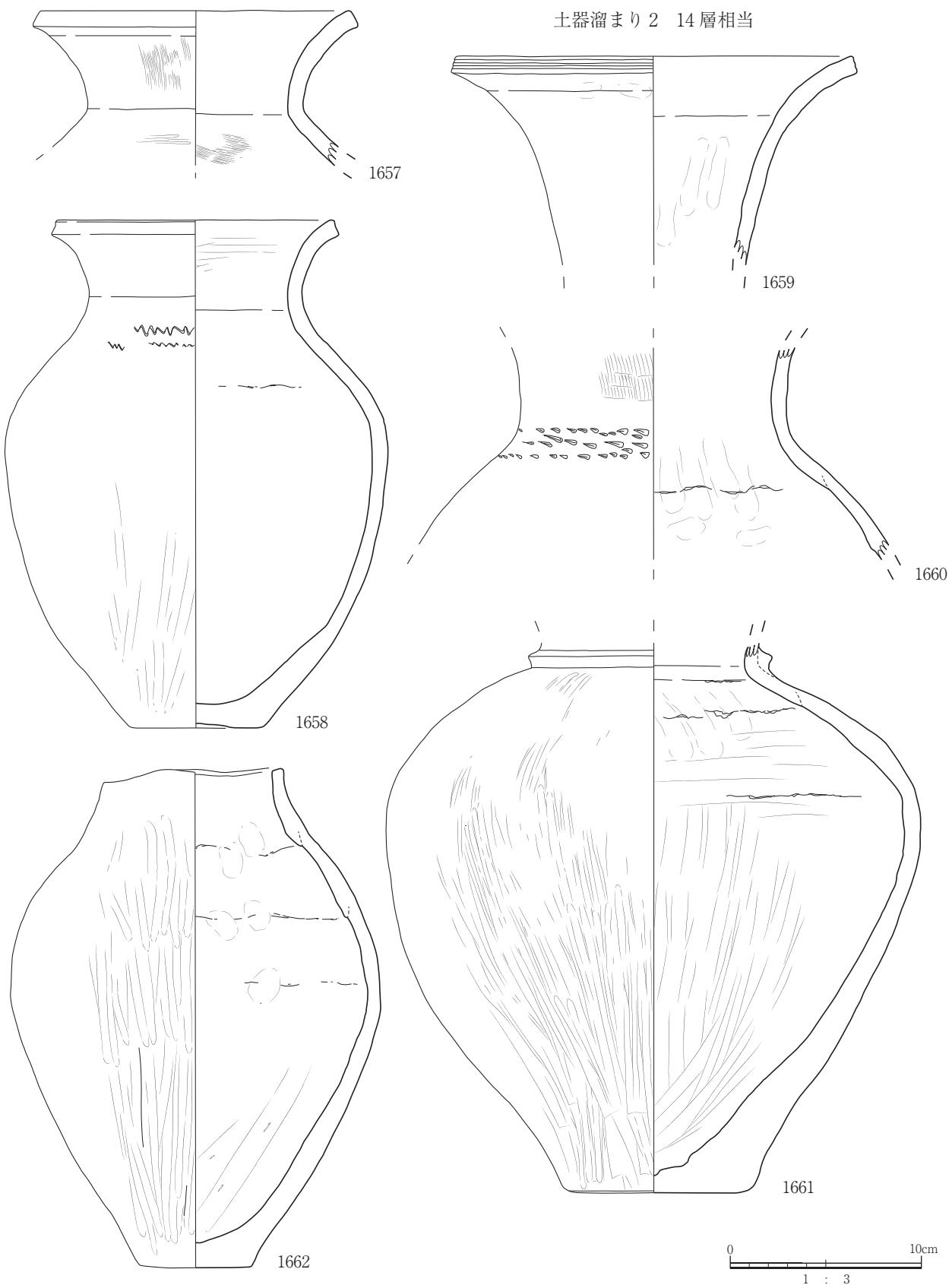


図455 SR25 出土遺物 50

は上方から4帯の櫛描文、波状文、2帯の櫛描文の文様で構成されており、円形透孔も認められる。1588の脚部には矢羽根形透孔がみられる。1590の外に拡張する口縁端部には凹線文を伴う。1592～1595の口縁部は、杯部から強い屈曲を境として外反して外に開く。1590・1592・1596～1598の脚部には円形透孔がみられる。1599は脚部の多くが中実となっている。1600～1616は弥生土器鉢である。1617は弥生土器鉢としたが、天地が逆の可能性もある。1618は比較的大型の弥生土器器台で、口縁部外面に2個一対の円形浮文が付く。胴部には互い違いに2段の円形透孔が認められる。1619はかえりをもつ須恵器杯、1620は高台が付く須恵器杯である。1621は土師器皿、1622は須恵器甕である。

1623～1640は土器溜まり1・18層相当から出土した遺物で、1623～1629は弥生土器壺である。1623の頸部には凹線文状の浅い沈線文が巡る。長頸壺1624・1625の口縁端部は上下に拡張し、凹線文を伴う。1624・1625の頸部には列点文が施されており、1625の列点文は矢羽根状に配されている。1630～1638は弥生土器甕である。1630はヨコナデが顯著で口縁端部が若干拡張する。1631・1632は頸部がやや明瞭で拡張する口縁端部に複数条の凹線文を有する。1631の胴部外面にはハケに先行するタタキ痕が残存する。1633～1635の口頸部境の屈曲は弱く、口縁部は短く端部は拡張しない。1639は弥生土器高杯の脚部、1640・1641は弥生土器鉢である。

1642～1716は土器溜まり2・14層相当出土の遺物で、1642～1664は弥生土器壺である。1643は頸部より下を欠損するが短頸広口壺だろう。1644～1648は広口壺で、拡張する口縁端部には複数条の凹線文が巡る。1644・1648の頸胴部境には刻目文突帯が認められる。1645・1646の口縁端部

土器溜まり2 14層相当

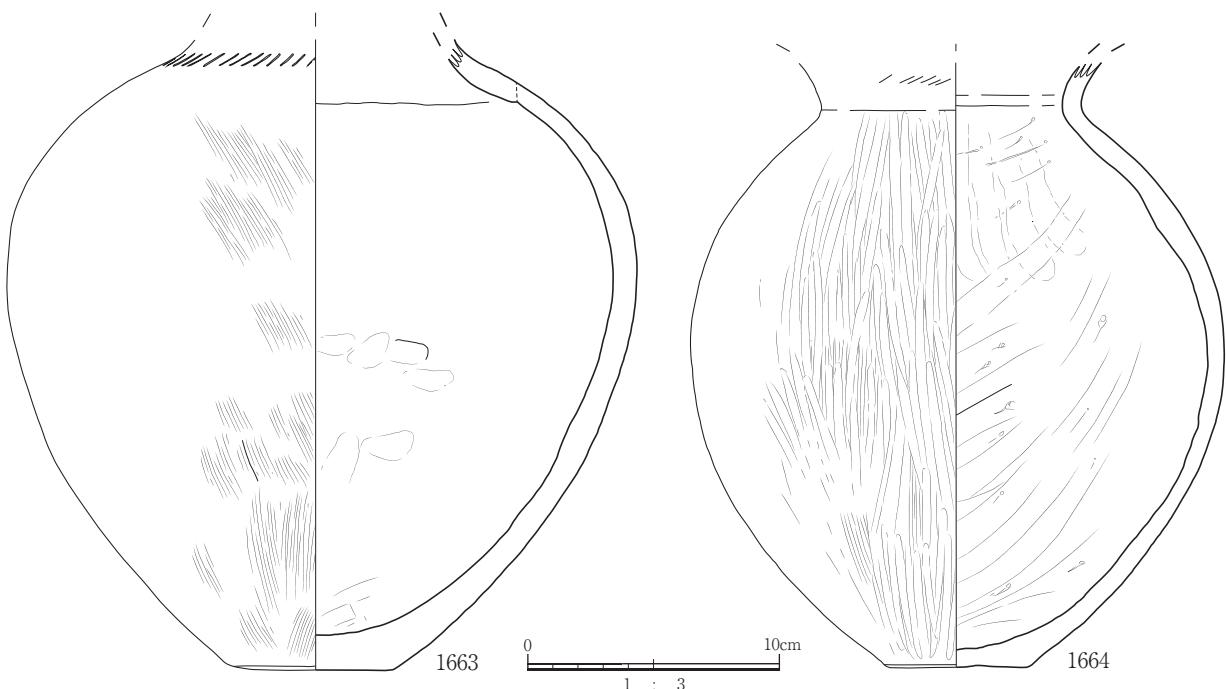


図456 SR25 出土遺物 51

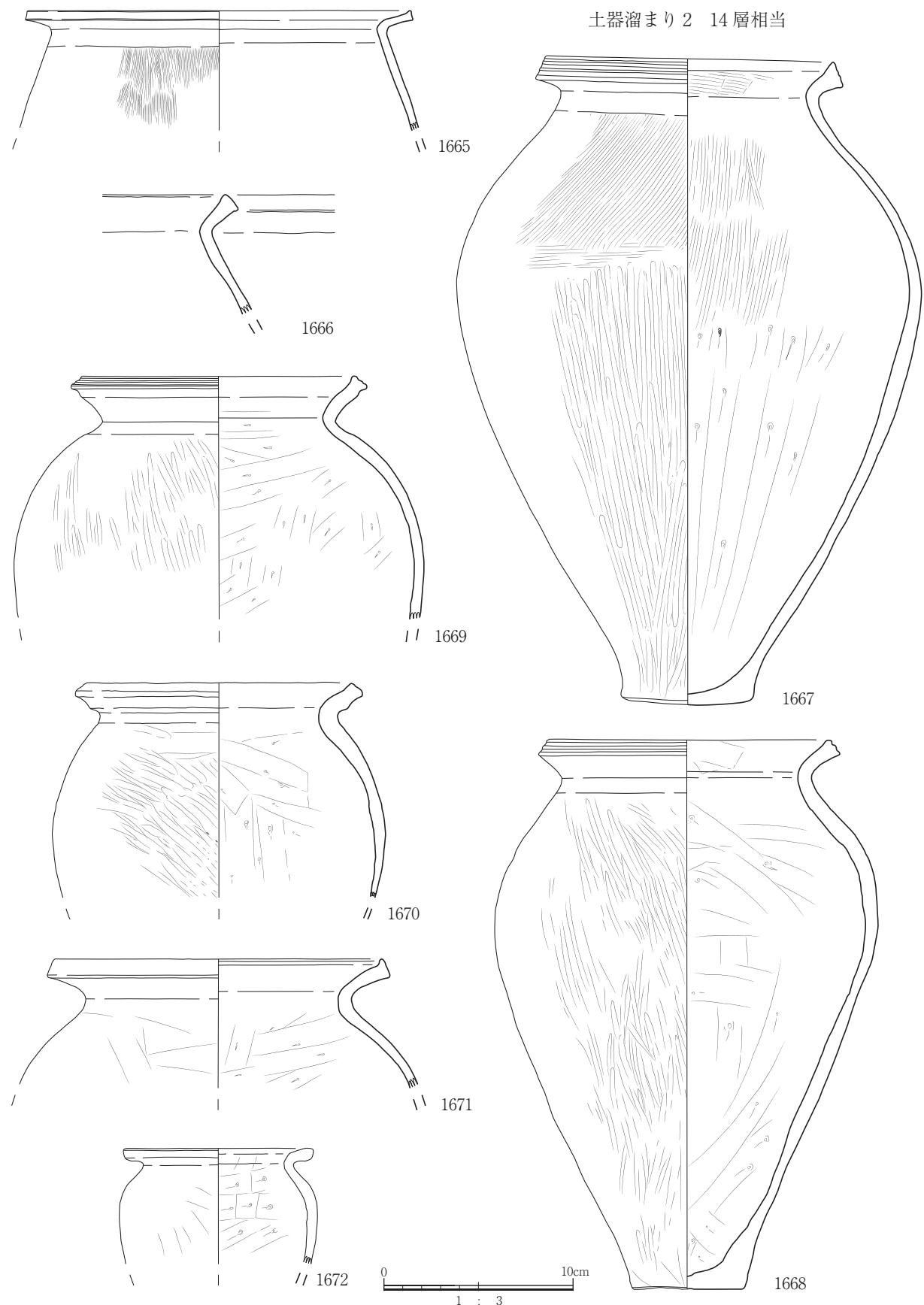


図457 SR25 出土遺物 52

は一定間隔で棒状浮文が付されている。1649の胴部上位にはハケ原体で網目状の櫛描文が描かれている。1650～1656はやや頸部が長いタイプである。1650はほぼ直立する頸部から屈曲して短い口縁部が付く。1650～1652の口縁端部はやや拡張して凹線文を伴う。1658の胴部はやや細身である。1657も同様のタイプの可能性がある。1662は無頸壺である。1665～1693は弥生土器甕である。1665はヨコナデが施されている。1666～1682・1684～1690・1692～1693の口頸部境の屈曲

土器溜まり 2 14 層相当

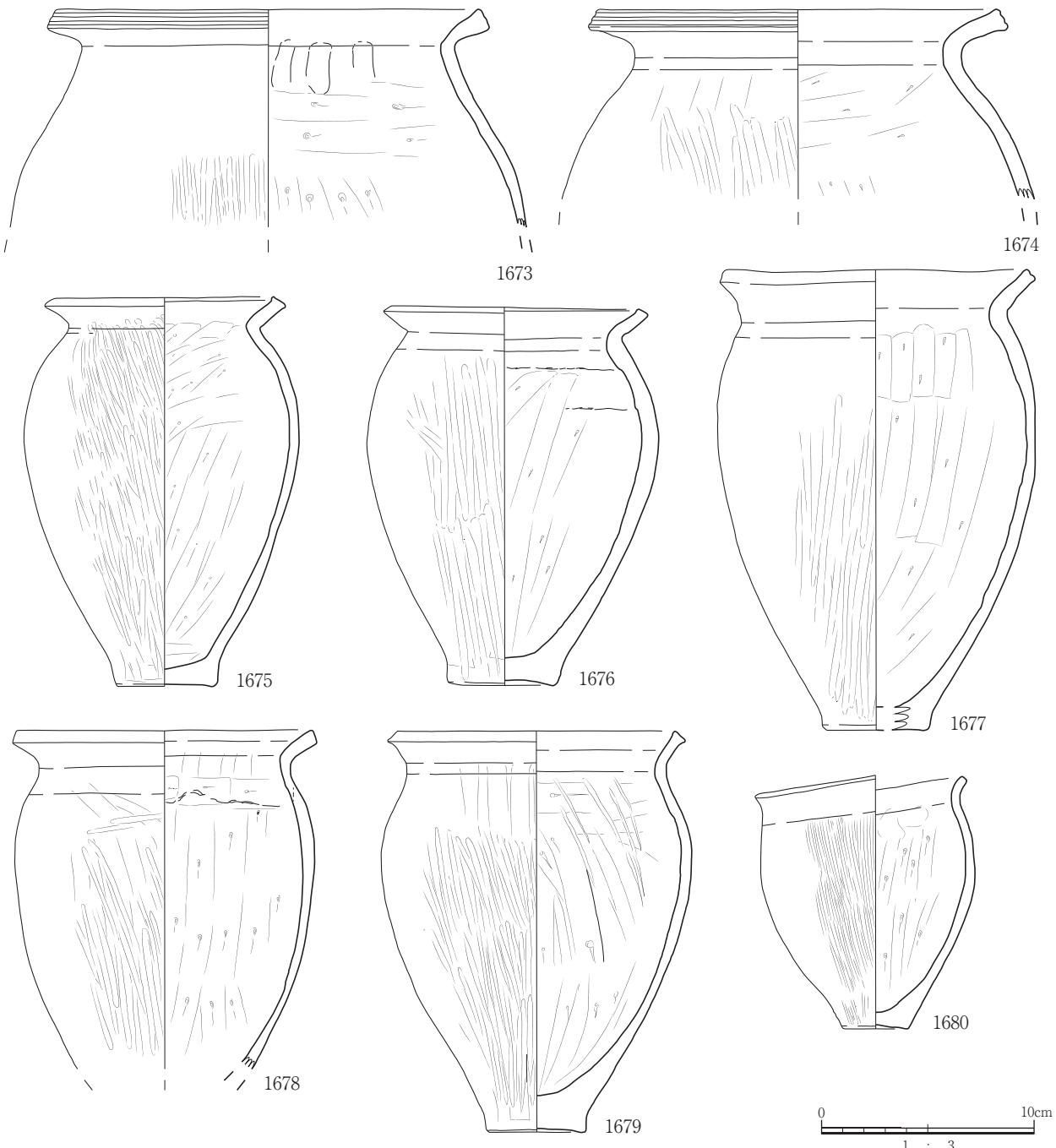


図458 SR25 出土遺物 53



図459 SR25 出土遺物 54

は弱い。1667・1668・1673・1674は口縁端部に数条の凹線文がみられる。1675～1684・1691・1692・1693は胴部が細身のタイプである。1694～1702は弥生土器高杯である。1694は口縁部外面に3条の凹線文が巡る。1695の脚部には貫通しない矢羽根形透孔が推定8方向に認められる。杯部内面には分割ミガキが施されている。1697・1698は杯部と口縁部の境に屈曲をもち、脚部には円形透孔を有する。1072・1073の脚部は細身で直線的である。1703～1715は弥生土器鉢である。1707・1708・1712は脚台をもつ。弥生土器器台1716の胴部には2段の円形透孔がみられる。

1717～1749は土器溜まり2・18層相当からの出土で、1717～1732は弥生土器壺である。1717は胴部上位に波状文と直線の櫛描文が描かれている。広口壺1718・1719の頸部には斜格子文突帯が

土器溜まり2 14層相当

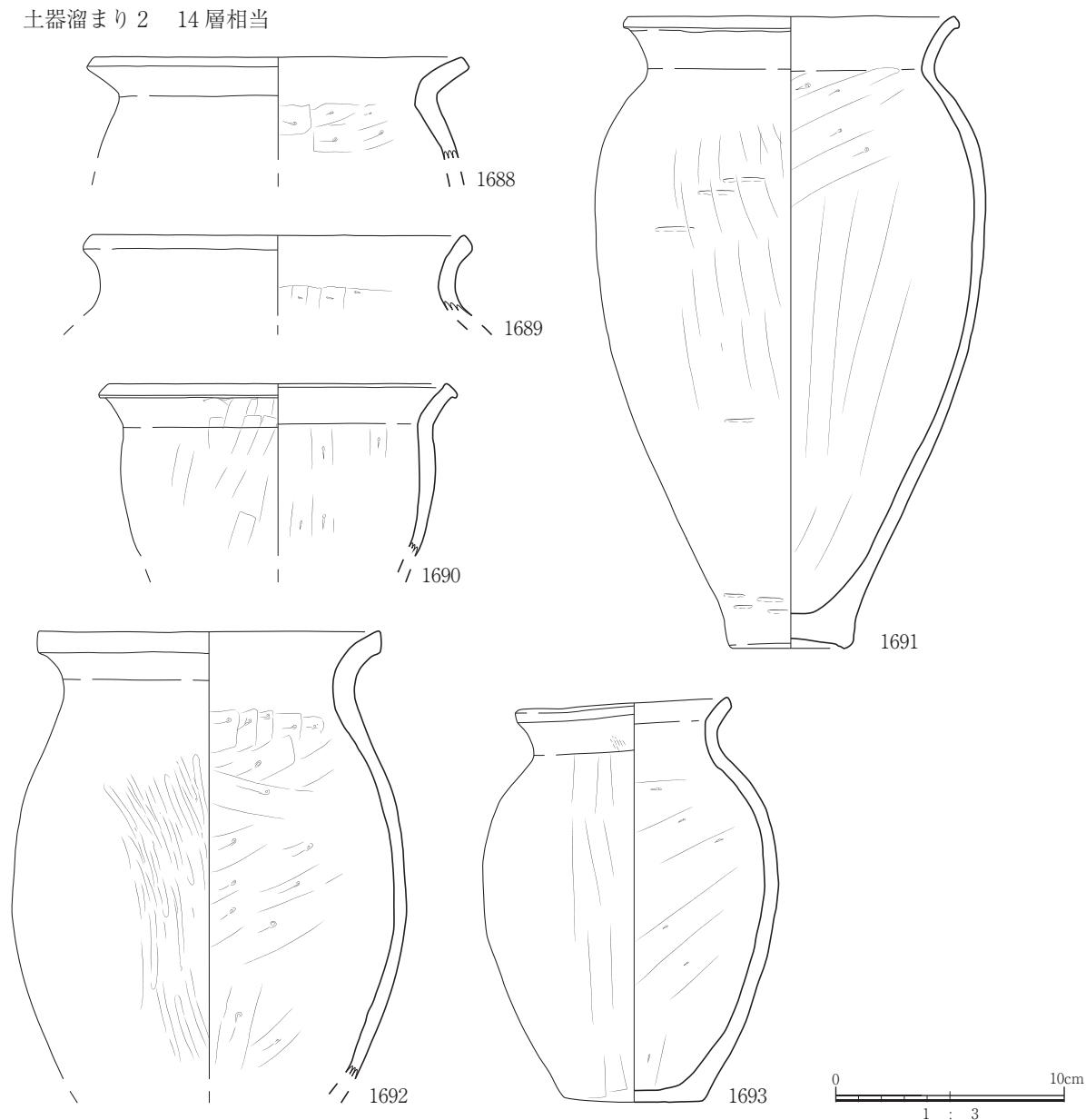


図460 SR25 出土遺物 55

土器溜まり 2 14 層相当

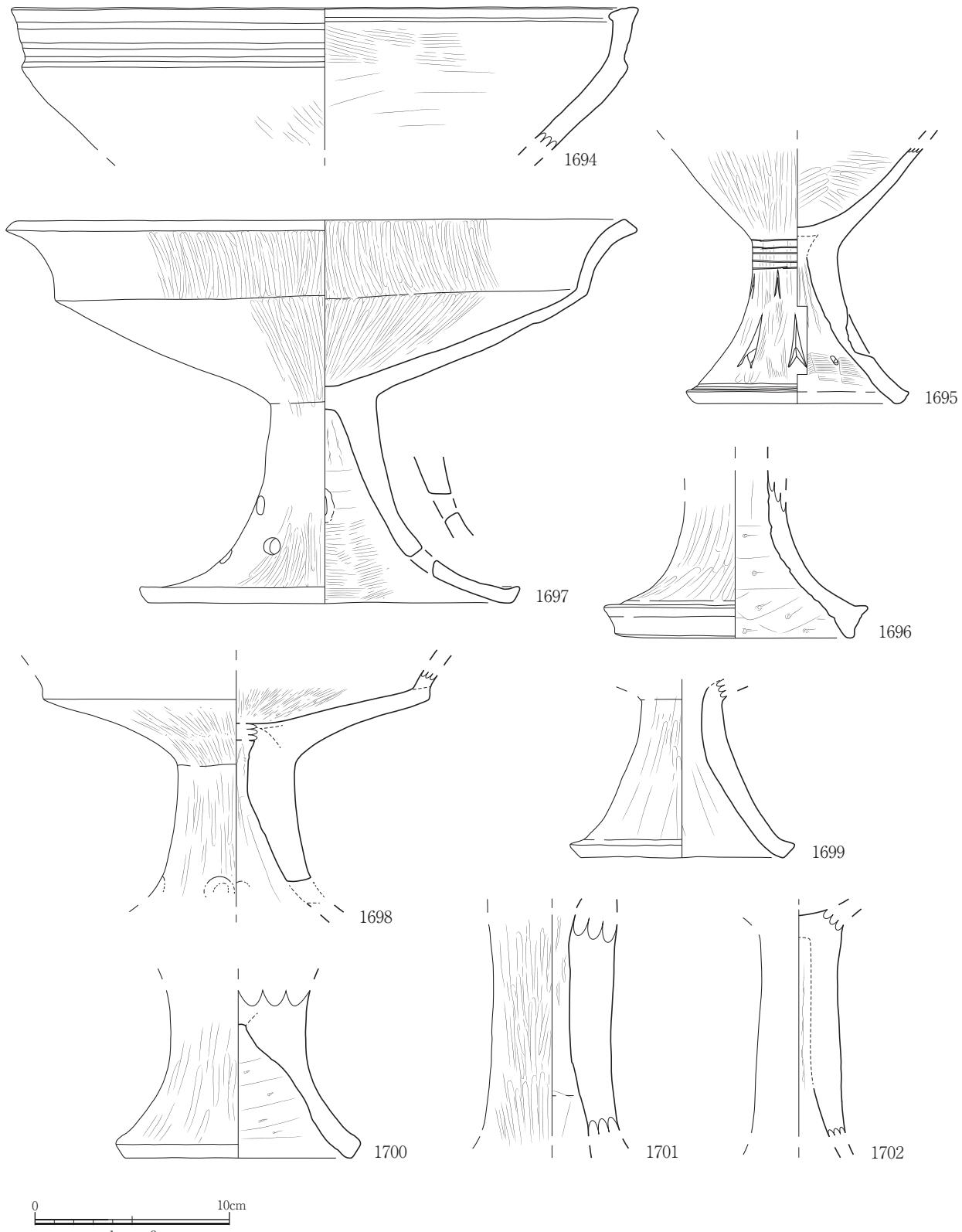


図461 SR25 出土遺物 56

土器溜まり 2 14 層相当

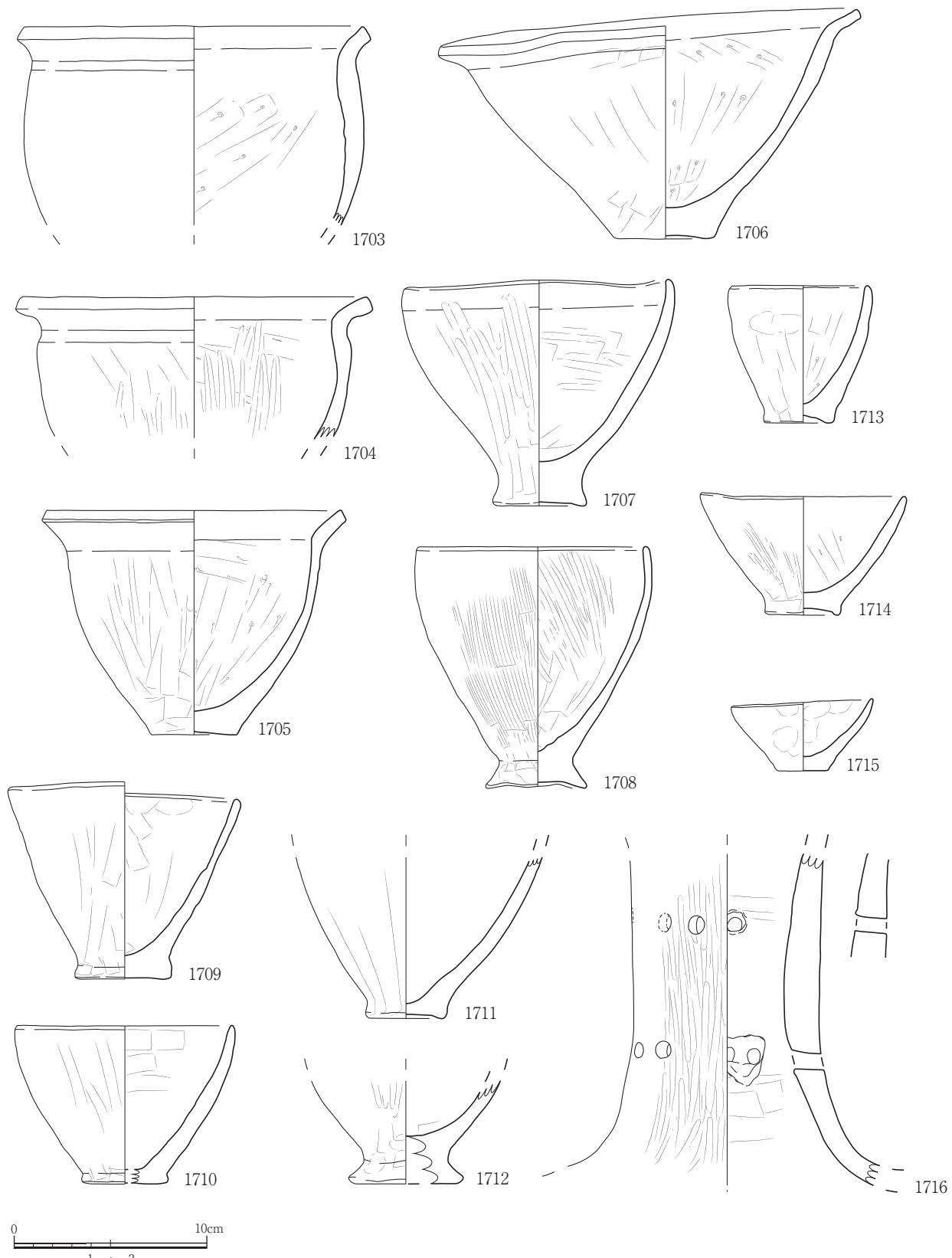


図462 SR25 出土遺物 57

土器溜まり 2 18 層相当

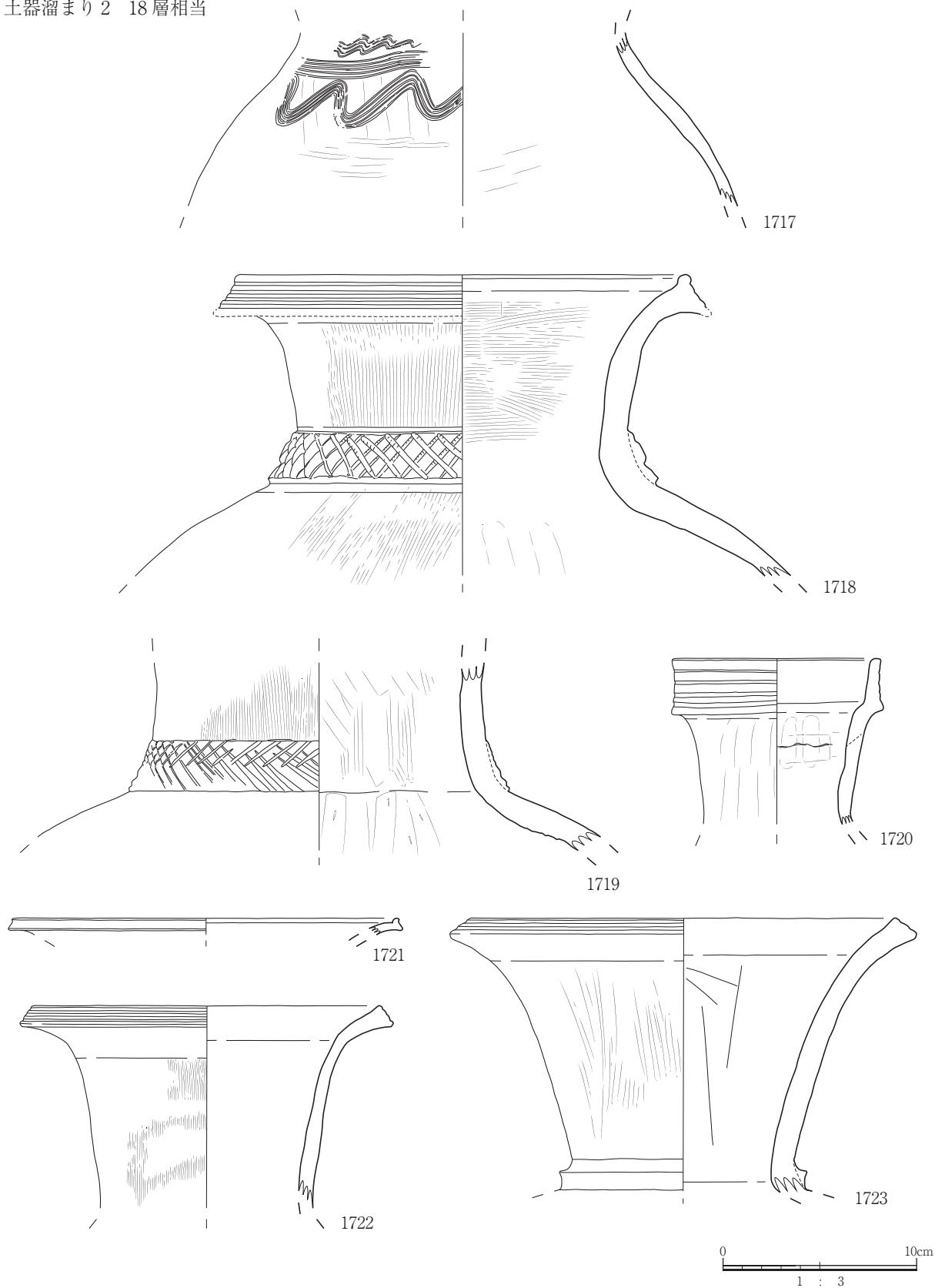


図463 SR25 出土遺物 58

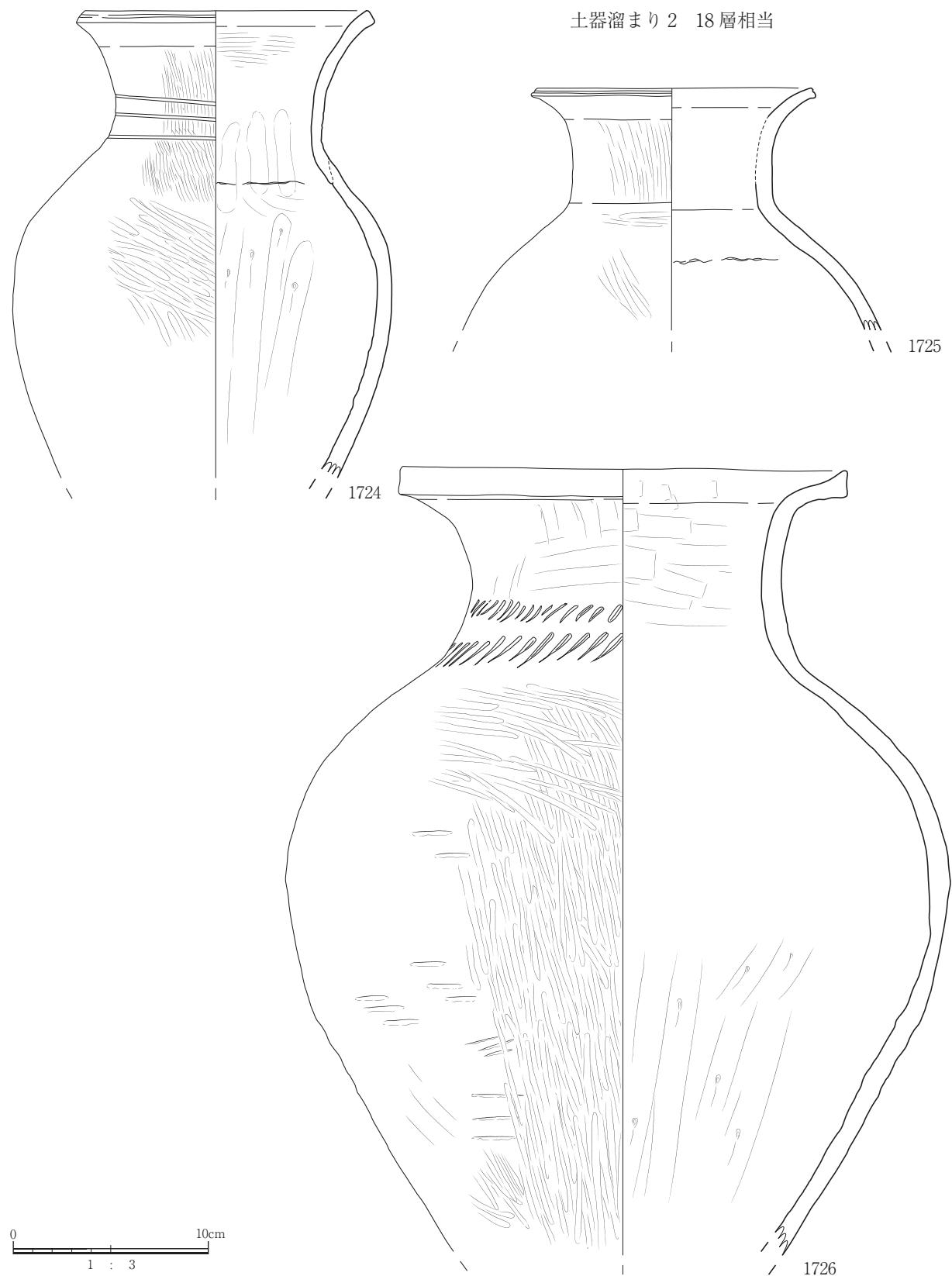


図464 SR25 出土遺物 59

土器溜まり 2 18 層相当

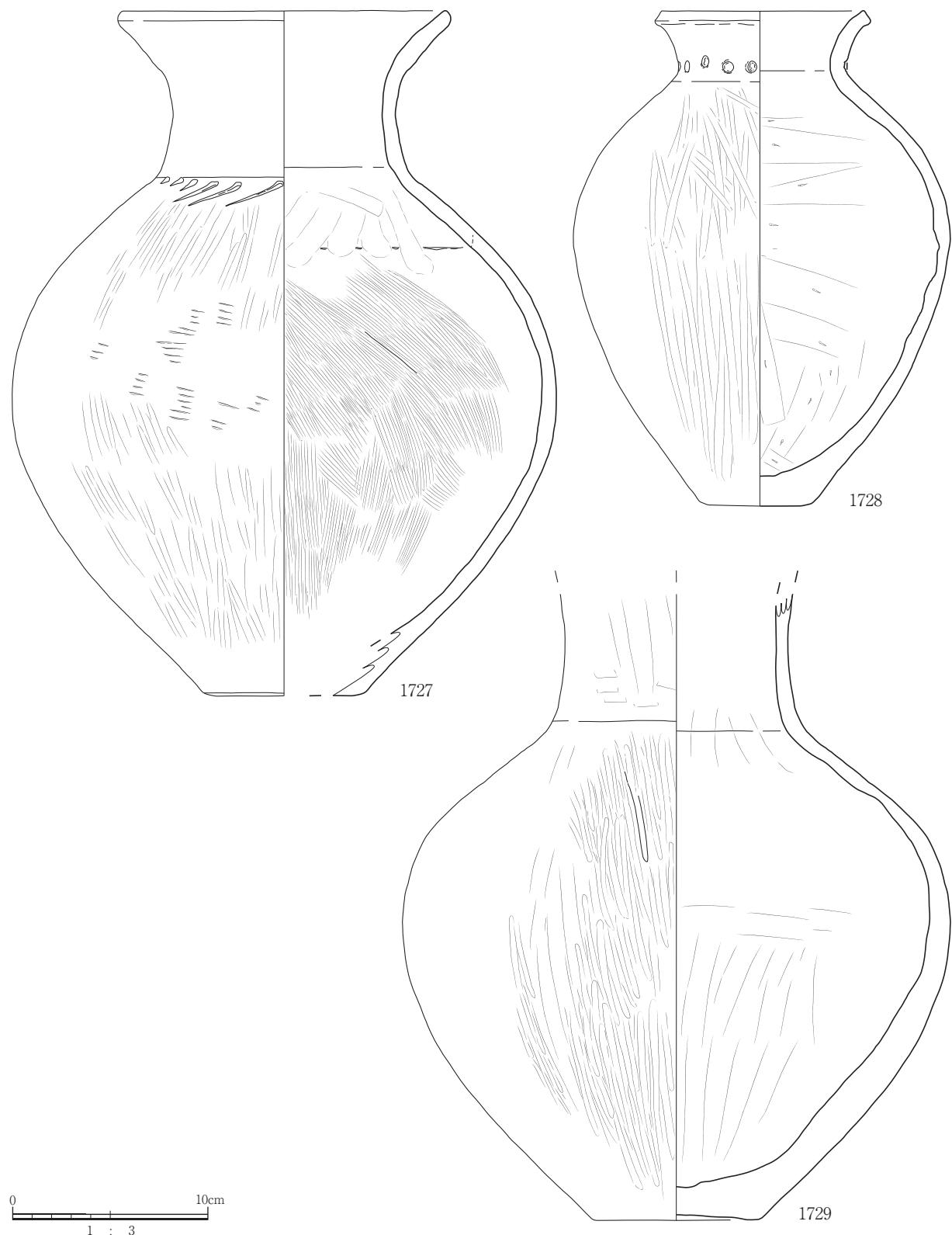


図465 SR25 出土遺物 60

土器溜まり 2 18 層相当

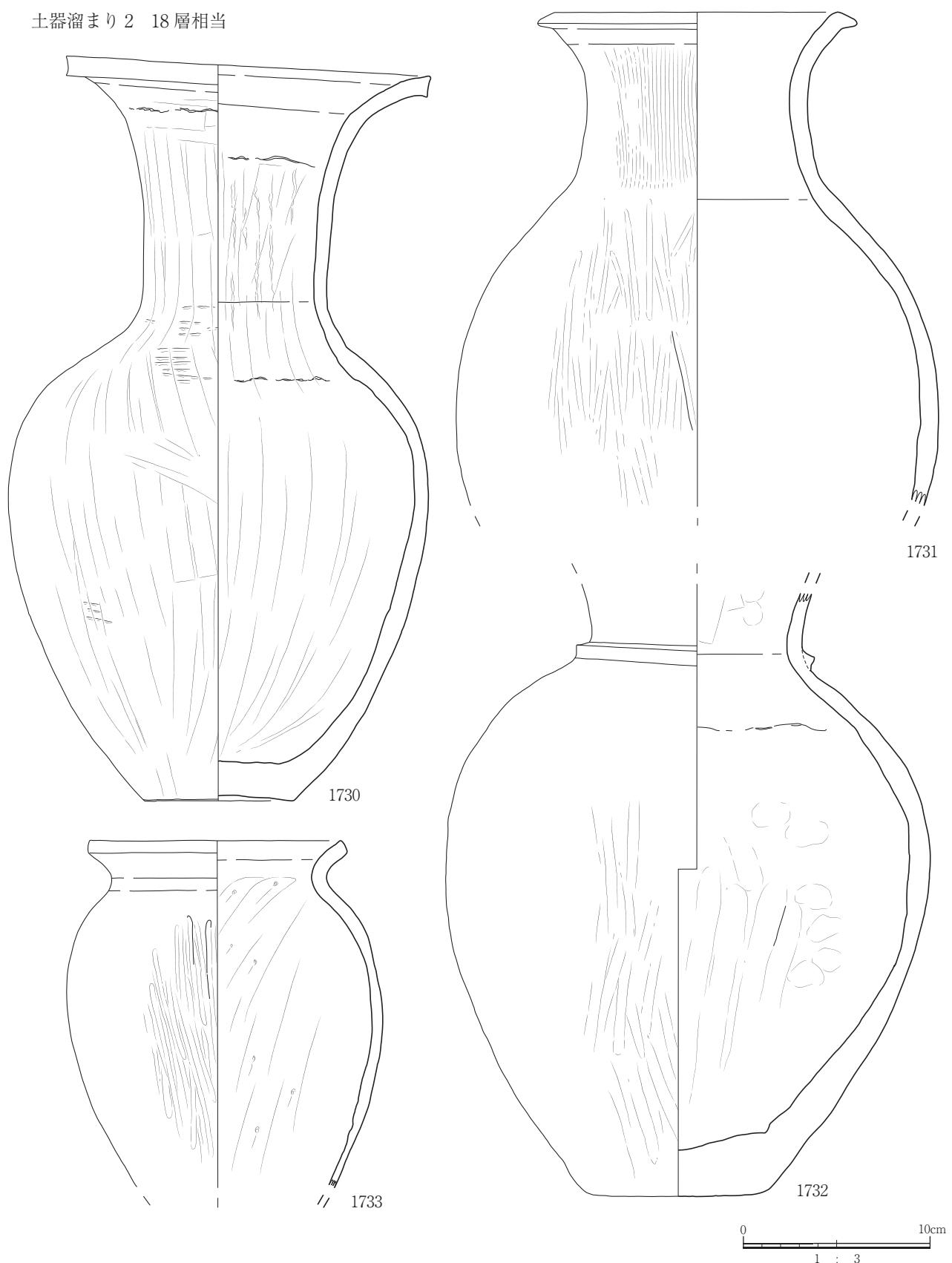


図466 SR25 出土遺物 61

土器溜まり 2 18 層相当

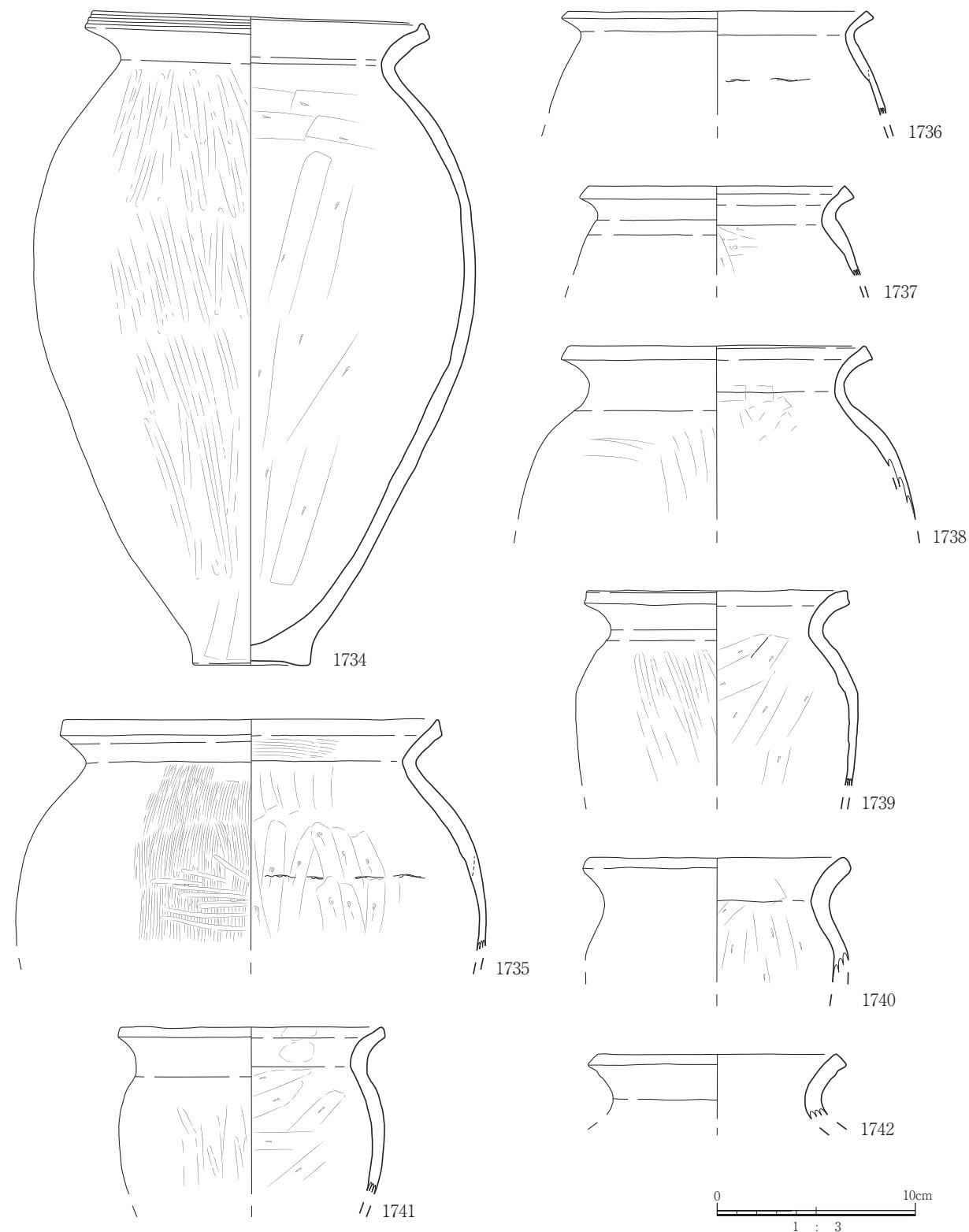
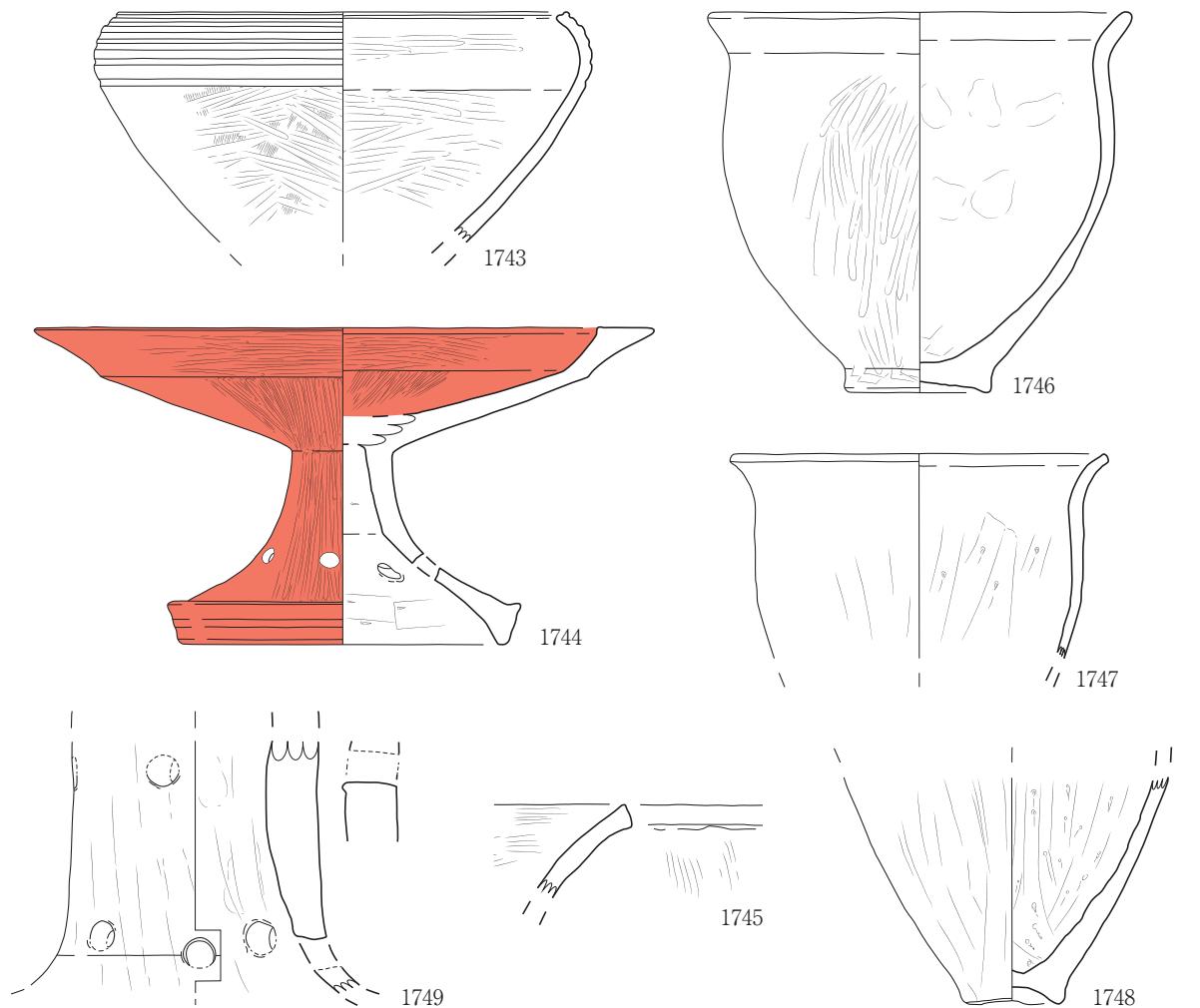


図467 SR25 出土遺物 62

土器溜まり 2 18 層相当



土器溜まり 2 層位不明

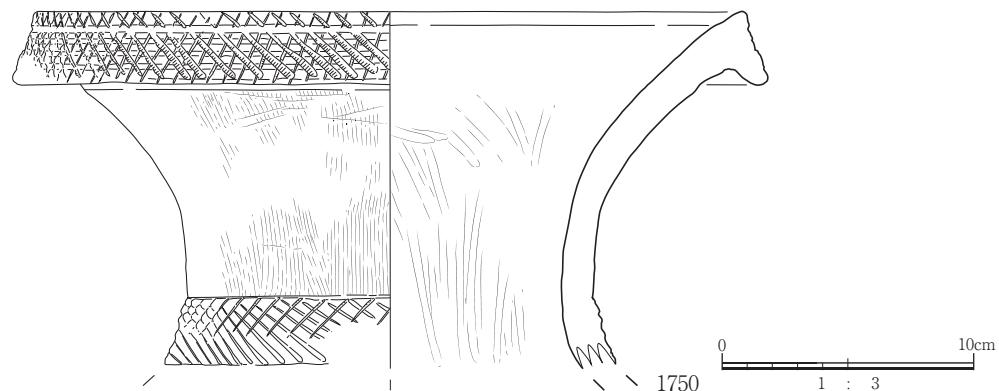


図468 SR25 出土遺物 63

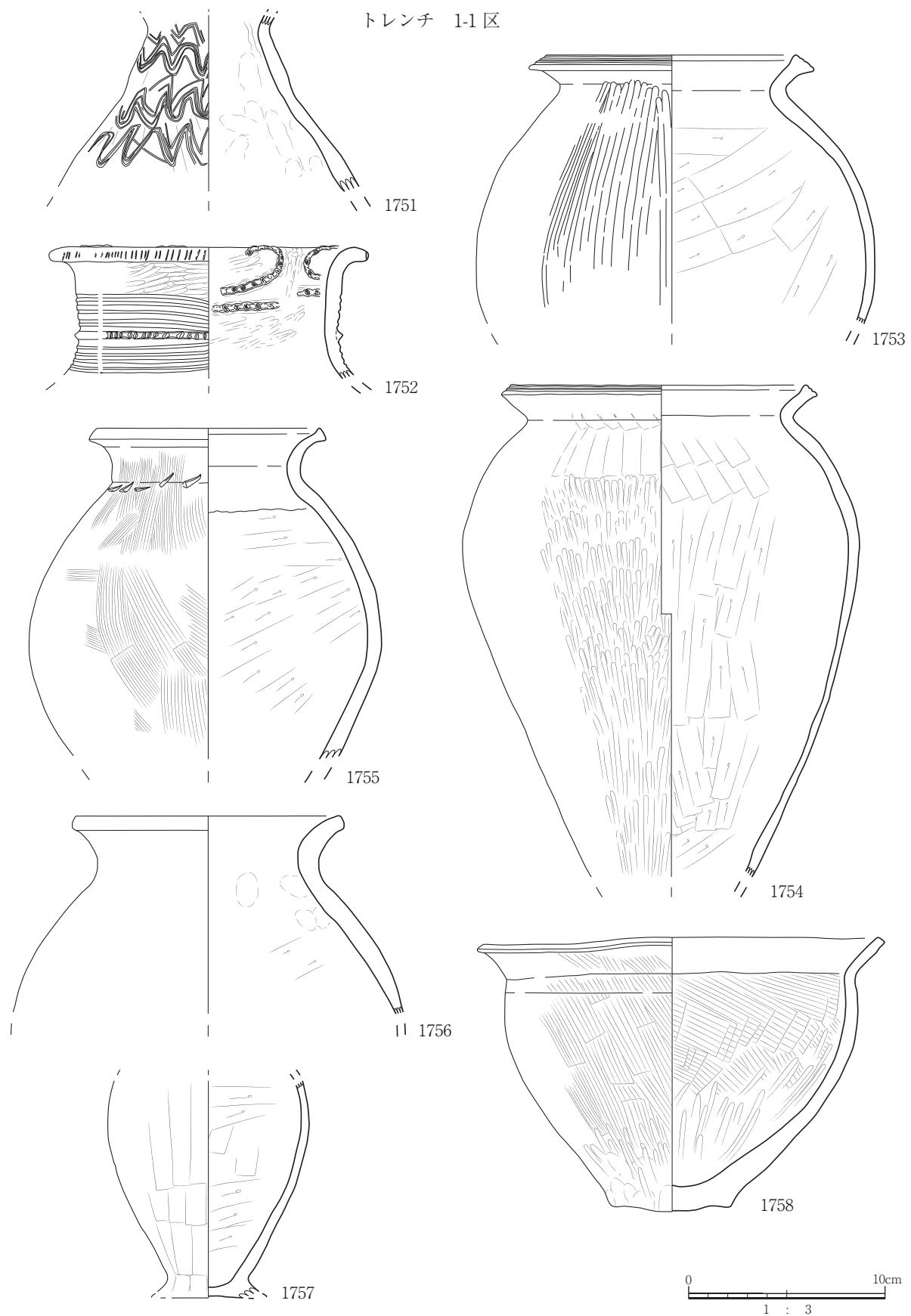


図469 SR25 出土遺物 64

付されている。1720はやや長く伸びる頸部から屈曲して口縁部が直立する。口縁部外面には凹線文4条が巡る。1722・1723は外に開く頸部から口縁部にいたるタイプである。肥厚する口縁端部には凹線文が認められる。1724～1727は頸部がやや長く、口縁部が外に開く。1724の頸部には凹線文状の沈線文、1726・1727の頸部、頸部直下には列点文がみられる。1728の頸部には円形の刺突文が施されている。1729～1731は長頸壺である。1733～1742・1748は弥生土器甕で、いずれも口頸部境の屈曲は弱くなっている。1734の口縁端部は若干上方に拡張し、凹線文を伴う。1743～1744は弥生土器高杯である。浅い杯部の1744の口縁端部は外に拡張する。脚部には円形透孔が巡り、外面と口縁部内面には赤色顔料が塗布されている。1745～1747は弥生土器鉢である。1749は弥生土器器台の胴部で、2段の円形透孔がみられる。

1750は土器溜まり2の出土層位不明の弥生土器壺である。口縁端部には細かな斜格子文、頸部には斜格子文突帯が施されている。

1751～1763はトレント1-1区として取り上げた遺物である。弥生土器壺1751は胴部上位に4段の波状文が描かれている。1752も弥生土器壺で、内面には蕨手状と直線状の突帯が貼付されている。頸部外面の文様は沈線文帯、刻目文突帯、沈線文帯で構成される。1753～1756は弥生土器甕である。1753・1754は口頸部境の屈曲が弱くなっているものの、口縁端部には凹線文を有する。1755の頸胴部境には列点文が認められる。甕としたが壺の可能性もある。1757・1758は弥生土器鉢である。1759・1760は須恵器杯である。土師器皿1761の内外面には赤色顔料が塗布されている。1762は土師質土器椀、1763は丸瓦である。

1764～1767は相違不明1-6区からの出土である。1764は長頸壺で頸部に凹線文状の沈線文は巡る。1765は口縁部外面に凹線文をもつ弥生土器高杯である。1766・1767は弥生土器鉢の脚部である。

1768は出土層位不明の平瓦である。

石器 1769は濃灰色を呈する泥質片岩製の石庖丁である。両側縁部に抉りを設ける。刃部は研磨により作出されるが、体部に研磨は施されていない。背部付近にも研磨は認められるが、端部は敲打されている。1770は濃緑色を呈する緑色片岩製の石庖丁で、左右を欠損する。B面には大きな剥離面があるため、原石を分割したものが素材となっている可能性がある。刃部および、凹んだ箇所を除いて研磨が施される。紐孔は1孔のみ残存し、穿孔は回転穿孔法によるとみられるが、敲打後回転穿孔法の可能性もある。1771は青灰色を呈する珪質片岩製の石庖丁でA面左下部を欠損する。両面に自然面を残すことから原石を素材としたことがわかる。剥離によって整形され研磨は施されない。上端部、下端部いずれにも明瞭な敲打痕は認められず、かつ摩耗しているため、上下端部が刃部として使用されたと考えられる。1772は泥質片岩製の石庖丁である。研磨は認められない。両側縁部には敲打がおこなわれ、A面左側縁部では抉りが形成されている。1773は泥質片岩製の石庖丁で、A面右側を欠損する。A面には自然面が残り、縦断面がA面を凸側とする山形を呈するため、B面を素材獲得時の剥離面と判断した。なお、B面には使用に伴うと推測される摩耗痕が広がる。刃部は細かな剥離、背部は敲打で仕上げられる。A面左縁側部にも敲打痕が認められるため、この敲打箇所の一部を紐掛け用の抉りとみた。欠損部の一部縁辺

部には敲打が行われているため、欠損後に別の用途で使用された可能性がある。B面の一部にはコーングロス状の光沢が認められる。1774はサヌカイト製の石匙である。1775は方柱状の砥石で、砥山(愛媛県砥部町)産と推測される淡褐色の流紋岩を石材とする。5面に擦痕が認められ、長軸方向に沿う面の中位は若干窪む。1776はやや緑色に近い淡緑色の緑色片岩製柱状片刃石斧の刃部付近で、基部を含む上部を欠損する。片理と刃線は直交する(縦目系)。体部は窪み部分を除けばほぼ研磨されている。前主面の一部に敲打痕が残るため、研磨段階に先行する敲打段階の存

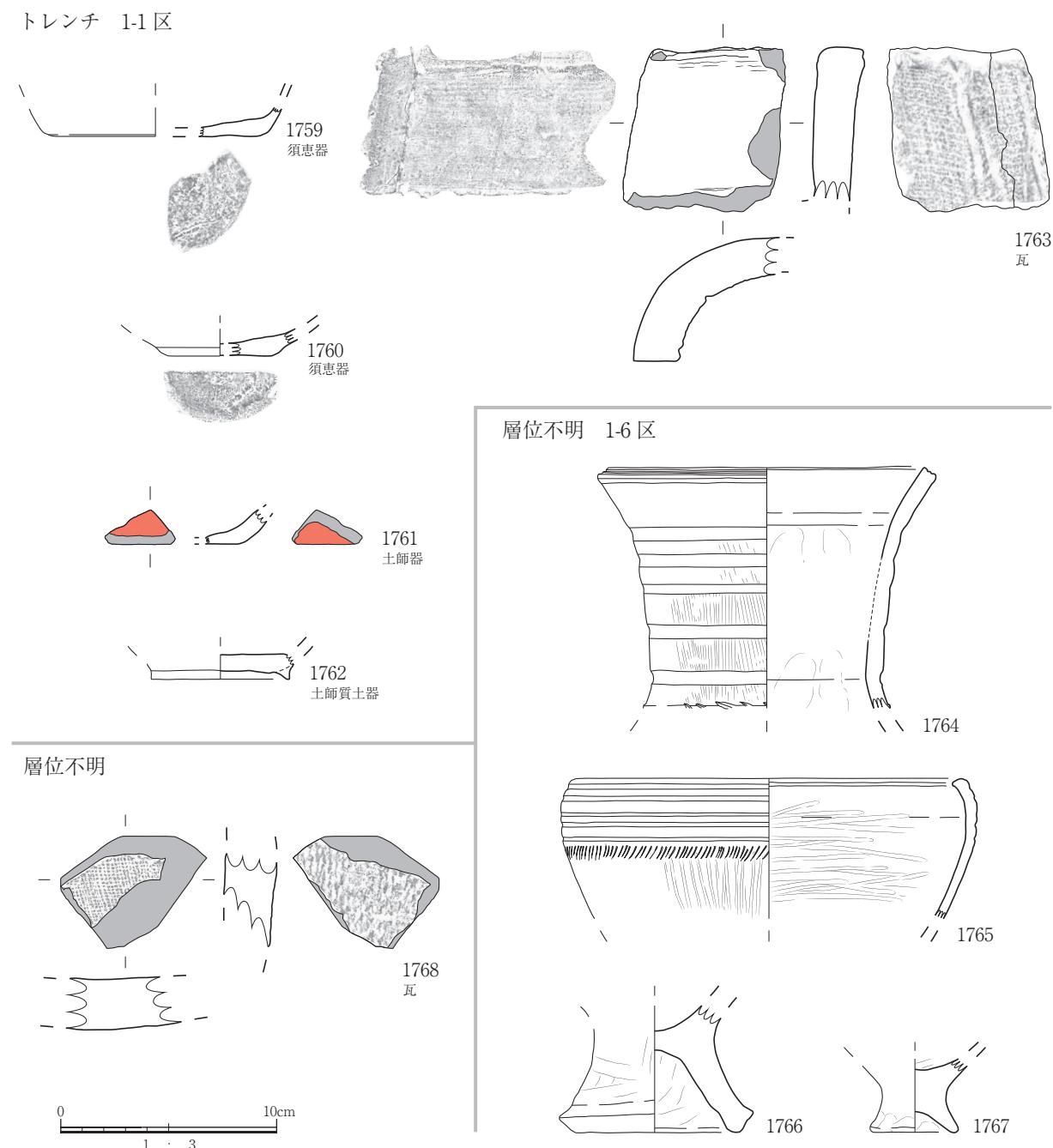


図470 SR25 出土遺物 65

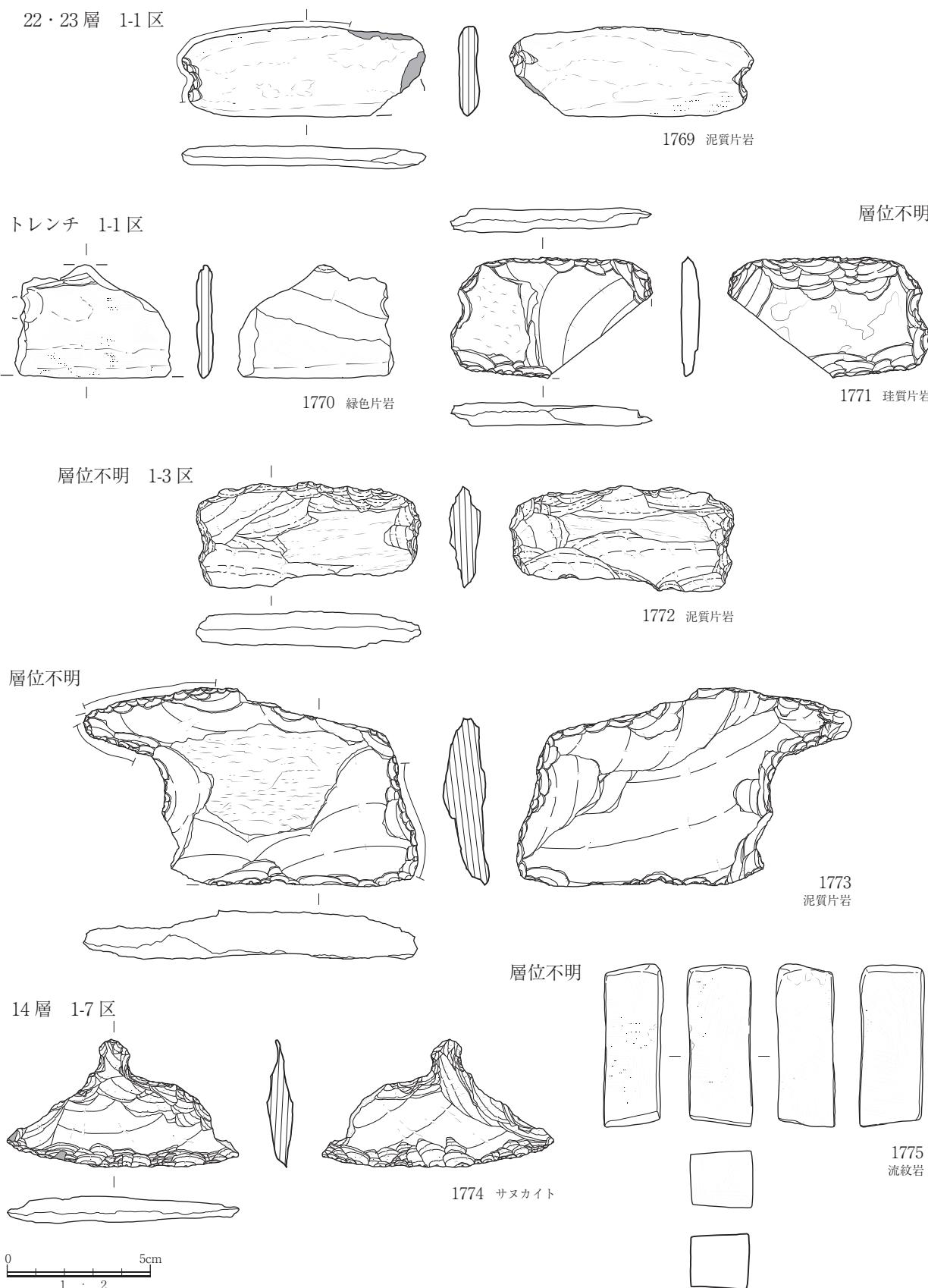
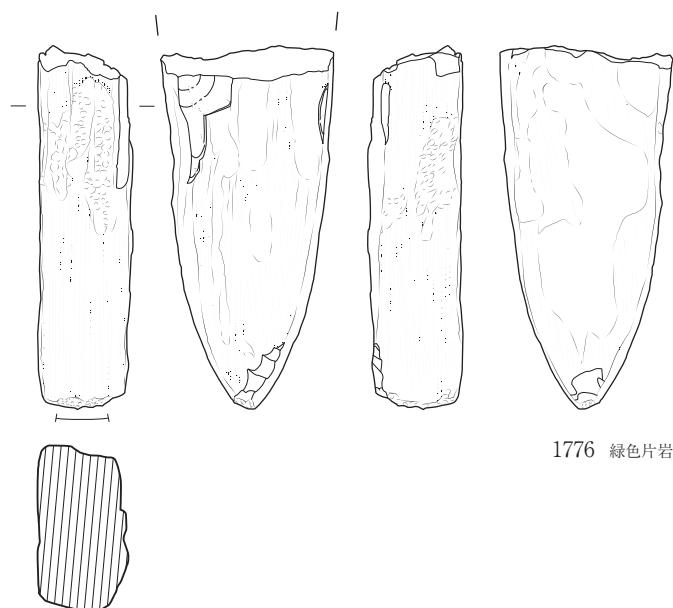
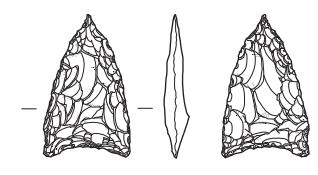


図471 SR25 出土遺物 66

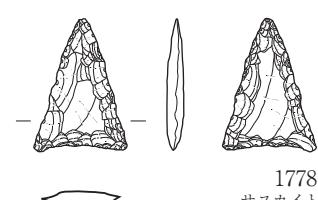
4層 1-1区



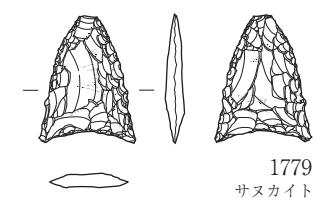
14層 1-8区



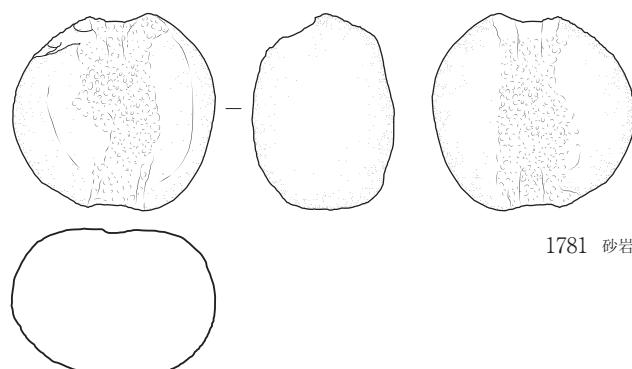
層位不明



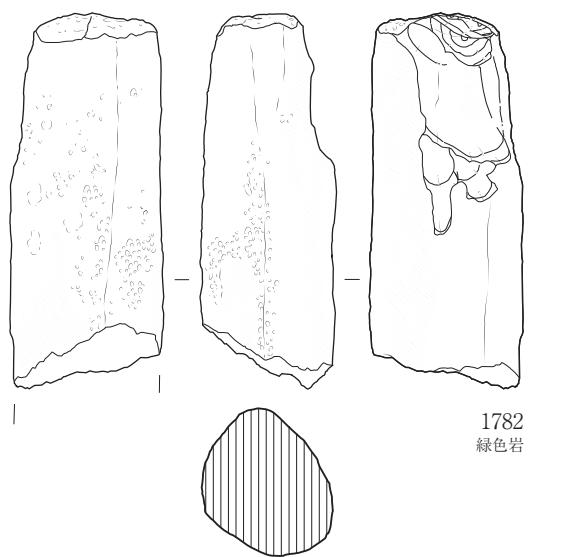
層位不明 1-2区



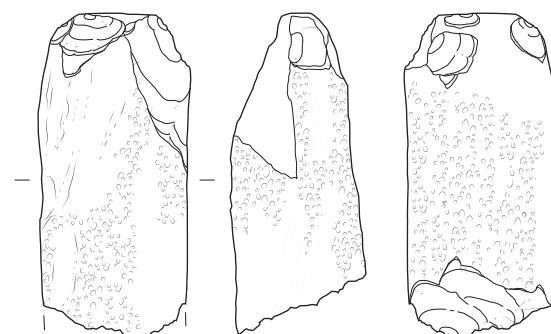
層位不明 1-8区



14層 1-5区



14層 1-5区



0
1 : 2 5cm

図472 SR25 出土遺物 67

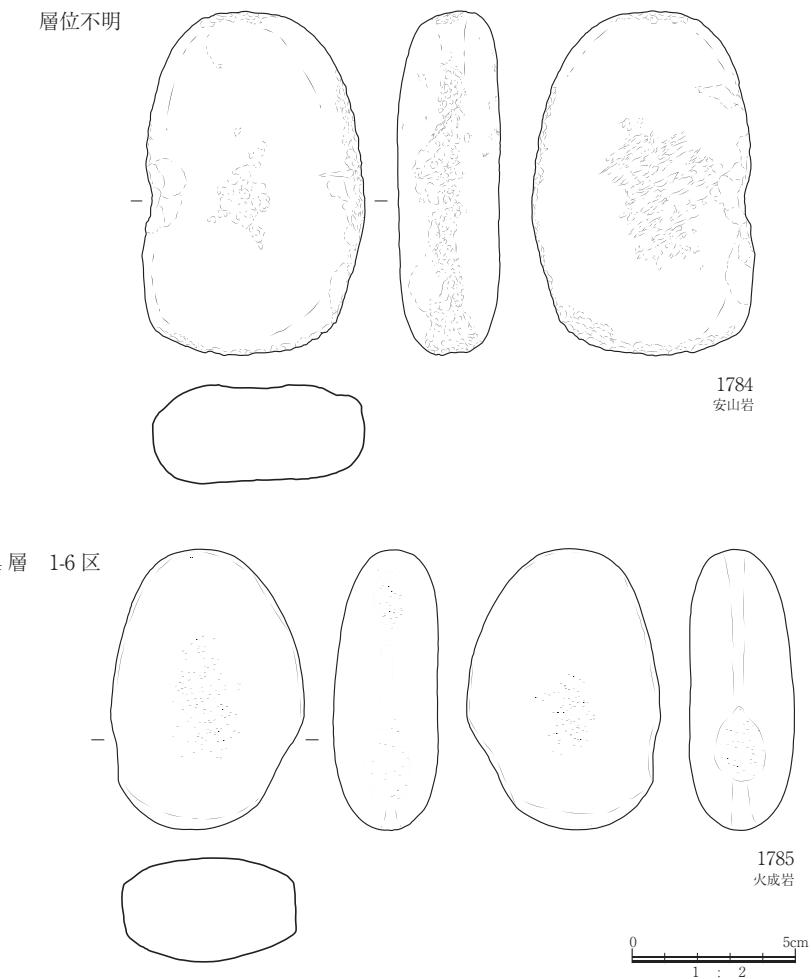


図473 SR25 出土遺物 68

在が確実である。刃部は使用により摩耗している。1777～1780はサヌカイト製の凹基式石鎌である。1781は砂岩製の有溝石鎌で、ややいびつな扁球状の原石に1条の溝が巡る。溝は敲打による。1782は緑色岩製の石棒で、下半部を欠損する。敲打後に一部研磨が施されている。残存する端部にも敲打痕が認められる。1783は下部を欠損する緑色岩製の石棒である。欠損をまぬがれた箇所には研磨面が残る。1784は安山岩製の叩石で一部に敲打痕が残る。1785は火成岩(安山岩か)製の磨石で、平面形は不整な橢円形に近く、断面形はやや扁平である。A面下位の両端に形成された平坦面には擦痕が残る。このような形状を意図して整形されたものとみられる。また、A面上下端部、左右端部、A面中央部、C面中央部に粗い擦痕があり、これらは使用に伴うものだろう。1786は花崗岩製の叩石でA面下方の突出部分に黒色の付着物が認められる。

(3)時期 土器溜まり1の遺物は、弥生時代中期後葉のものも含まれるが、大半は弥生時代後期前

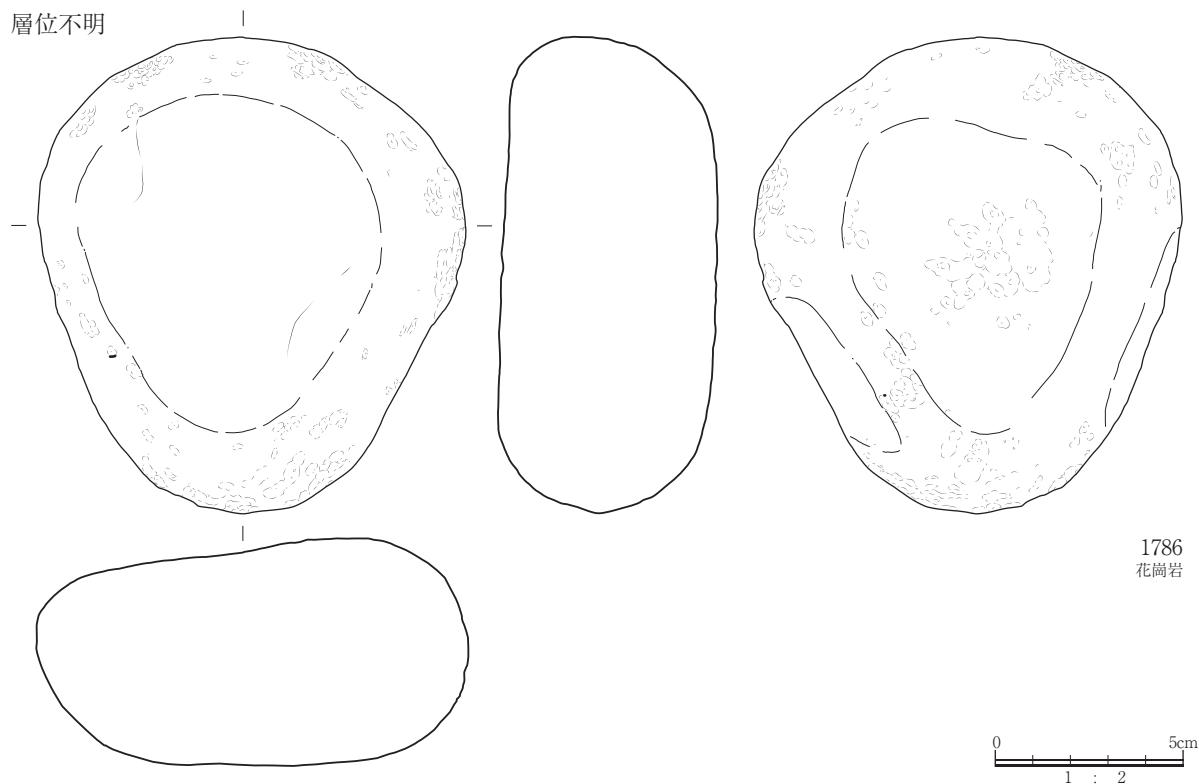


図474 SR25 出土遺物 69

葉～中葉(V-1～V-3様式)に位置づけられる。土器溜まり2の遺物も同様に弥生時代後期前葉～中葉(V-1～V-3様式)に属する。なお、土器溜まり1に比べて土器溜まり2のほうが後期前葉(V-1～V-2様式)の遺物が多い傾向にある。以上のことから、土器溜まり1・2は後期前葉～中葉(V-1～V-3様式)に形成されたと考えられる。土器溜まりを除く14・18層を中心とした遺物は後期前葉～中葉(V-1～V-3様式)を多く含みながらも、1396～1299・1413～1416・1468～1470・1473など、1-7区には古墳時代前期(I-1～I-2期)の遺物がまとまって出土している。全体的には流路が堆積する時期は土器溜まり1・2の形成時期に近いが、SR11・27との合流地点付近の1-7区では古墳時代前期(I-1～I-2期)にも遺物を伴って堆積している。おそらく、1-7区の14・18層は古墳時代前期のSR11と連続するのだろう。なお、上層、1・2層の多くは8～9世紀で、最終的な埋没は上層の1287から10世紀と判断できる。

18 SR26 (7区-谷1-2)_浅谷1-E

(1)遺構(図383～398) 南西から北東へ伸びる流路で、長軸方向はN45°-Eである。全長が残存で10.44m、幅は10.44m～8.28m、最大深度は2.08mである。黒色および灰色の粘質土が主体で、おおむね水平堆積であることから比較的緩やかな堆積が想定できる。中位～下位層にかけて植物残滓を含む腐植土層であり、SR25と共に状況が認められる。断面d-d'からは、SR25との新旧関係についてはSR25の最終埋没よりもSR26の方が古い可能性が読み取れる。

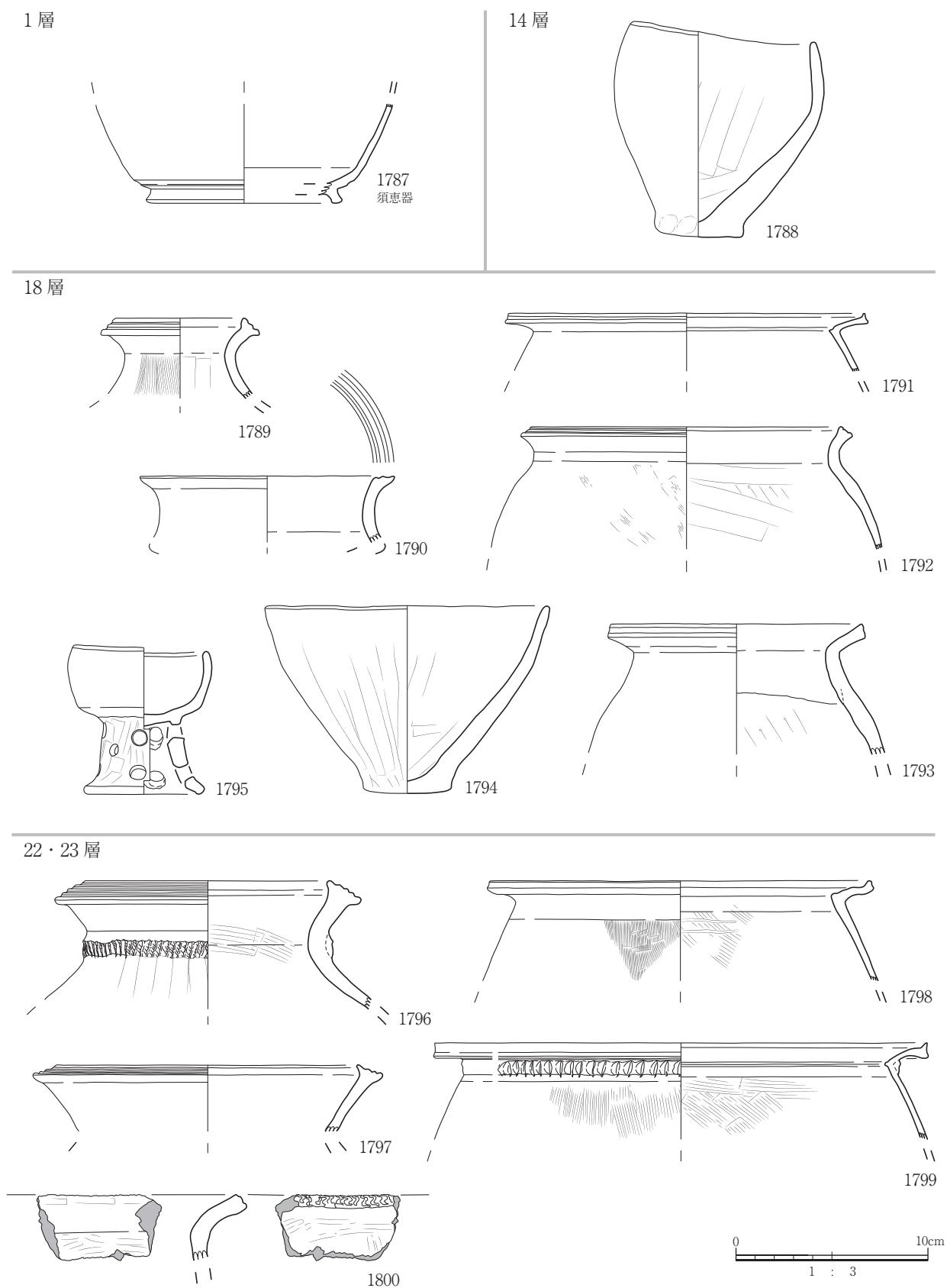


図475 SR26 出土遺物 1

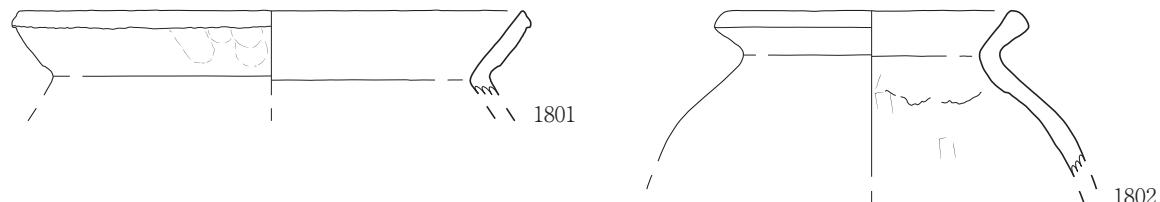
(2) 遺物(図475・476) 20点を図化した。

土器 1787は1層から出土した須恵器杯で、高台を有する。

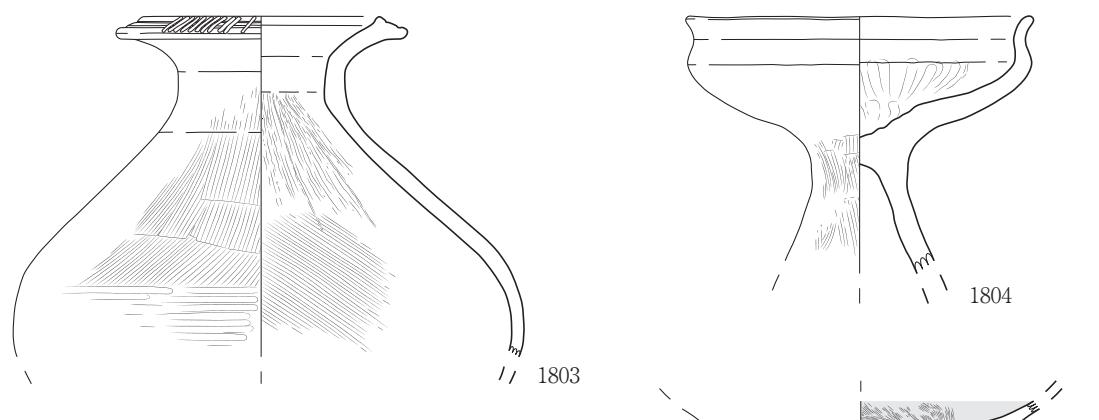
1788は14層出土の弥生土器鉢である。

1789～1793は18層から出土した弥生土器である。1789は短頸広口壺で口縁端部に明瞭な凹線文をもつ。1790は壺の口縁部で口縁端部上面に2条の凹線文が巡る。1791～1793は弥生土器甕である。1791はヨコナデが顕著で、1792・1793はヨコナデが弱くなっている。1794は弥生土器鉢である。1795は小型の高杯で杯部の下方に広めの脚部が接続する。濃灰色に近い色調を呈し、整形は粗雑である。

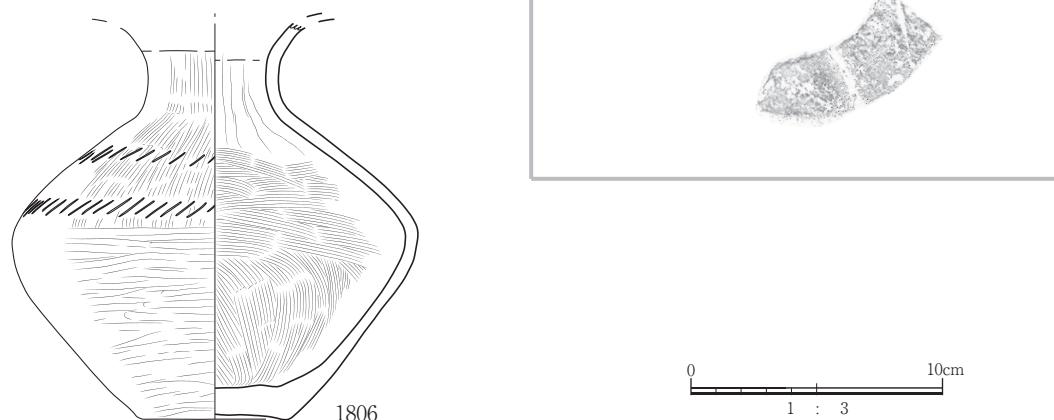
22・23層



トレンチ



層位不明



0 10cm
1 : 3

図476 SR26 出土遺物 2

1796～1802は22・23層から出土した。1796・1797は弥生土器壺で拡張する口縁端部に凹線文を伴う。1798～1802は弥生土器甕である。1799はヨコナデにより強く屈曲する頸部の外面に圧痕文突帯がみられる。1800は如意形口縁で口縁端部に刻目文をもつ。

1803～1805はトレンチ出土として取り上げたものである。短頸広口壺1803の口縁端部外面の一部には長い刻目文が施されている。1804は弥生土器高杯、1805は内黒の黒色土器杯である。1806は出土層位不明の弥生土器壺である。胴部上半には2段の列点文が認められる。

(3)時期(図**) 中期後葉の遺物が多数を占めるが、1792・1793・1802から弥生時代後期前葉(V-1～V-2様式)と考えられる。1層出土の1843が属する8世紀は最終埋没時期を示すのだろう。

19 SR27 (7区-谷2+12区-谷2)_浅谷1-D

(1)遺構(図383・384・390・391) 南西から北東へ伸びる流路で、長軸方向はN-37°-Eである。全長が残存で112.14m、幅は9.18～17.1m、最大深度は2.2mである。上位に黒色粘土層、下位では灰色～黒褐色粘質土層となる。下位の粘質土層を中心に植物残滓や種子などを含むことから、埋没過程では安定した流れに伴う堆積があったと想定される。武器形木製品は、断面g-g'の6・8層境目付近より出土した。木質遺物はほかに背負子、板、杭、自然木、樹皮が出土している。最下層(断面h-h'、26層)からは弥生時代前期の土器が出土している。SD228・275、SR11に先行し、SD237・303に後出する。

(2)遺物(図477～483) 繩文土器、弥生土器、弥生時代終末期～古墳時代前期の土器、土師器、石器など229点が出土した。このうち53点を図化した。

土器 1807～1815は上層からの出土である。1807は大型の弥生土器壺で、頸部には沈線と削り出し突帯が巡る。内外面ともにミガキが密におこなわれている。1808～1812は弥生土器甕である。1808・1809は如意形口縁をもち、頸部直下に2条の沈線が施される。1809の胴部最大径付近には2条の沈線に挟まれる竹管文が認められる。1810はヨコナデを伴い、頸部には押圧文突帯が貼付される。1813は弥生土器鉢で、外面には板ナデに先行するタタキが残る。1814は須恵器蓋である。1815は土師器杯で内外面に赤色顔料が塗布されている。1816は須恵器杯である。

1817は上層、または9層として取り上げられた弥生土器甕である。9層は断面g-g'9層に相当する。胴部は細身で頸部からは短い口縁部が伸びる。

1818～1827は9層として取り上げた遺物である。1818は弥生土器の短頸広口壺である。1819～1823は弥生土器甕である。1819・1820はヨコナデが顕著で1819の胴部上位には列点文が施されている。1821の整形は粗雑である。1822は表面が剥落し、外面口縁部付近にはタタキ痕が残る。1823の文様は沈線帯と刺突文で構成される。1824～1826は弥生土器鉢で1826は厚めの脚部をもつ。1827は製塩土器の脚部である。

1828～1830はトレンチ1として取り上げた遺物である。1828は弥生土器壺で頸胴部境に沈線文が認められる。弥生土器甕1829の胴部上位には沈線文と山形文がみられる。1830は弥生土器甕でヨコナデにより口縁端部には凹線文が形成されている。

1831はトレンチ2として取り上げられた大型の弥生土器壺の底部である。

1832・1833はトレンチ4からの出土である。1832は如意形口縁をもつ弥生土器甕で、口縁端部には刻目文、胴部上位には沈線文がみられる。1833は弥生土器壺である。

1834～1847はトレンチ5からの出土で、1834～1837は弥生土器壺である。1834・1835は頸部に2条の沈線文が施されている。1836は算盤玉状の胴部をもつ直口壺で、胴部上半部に2段の列点文

上層

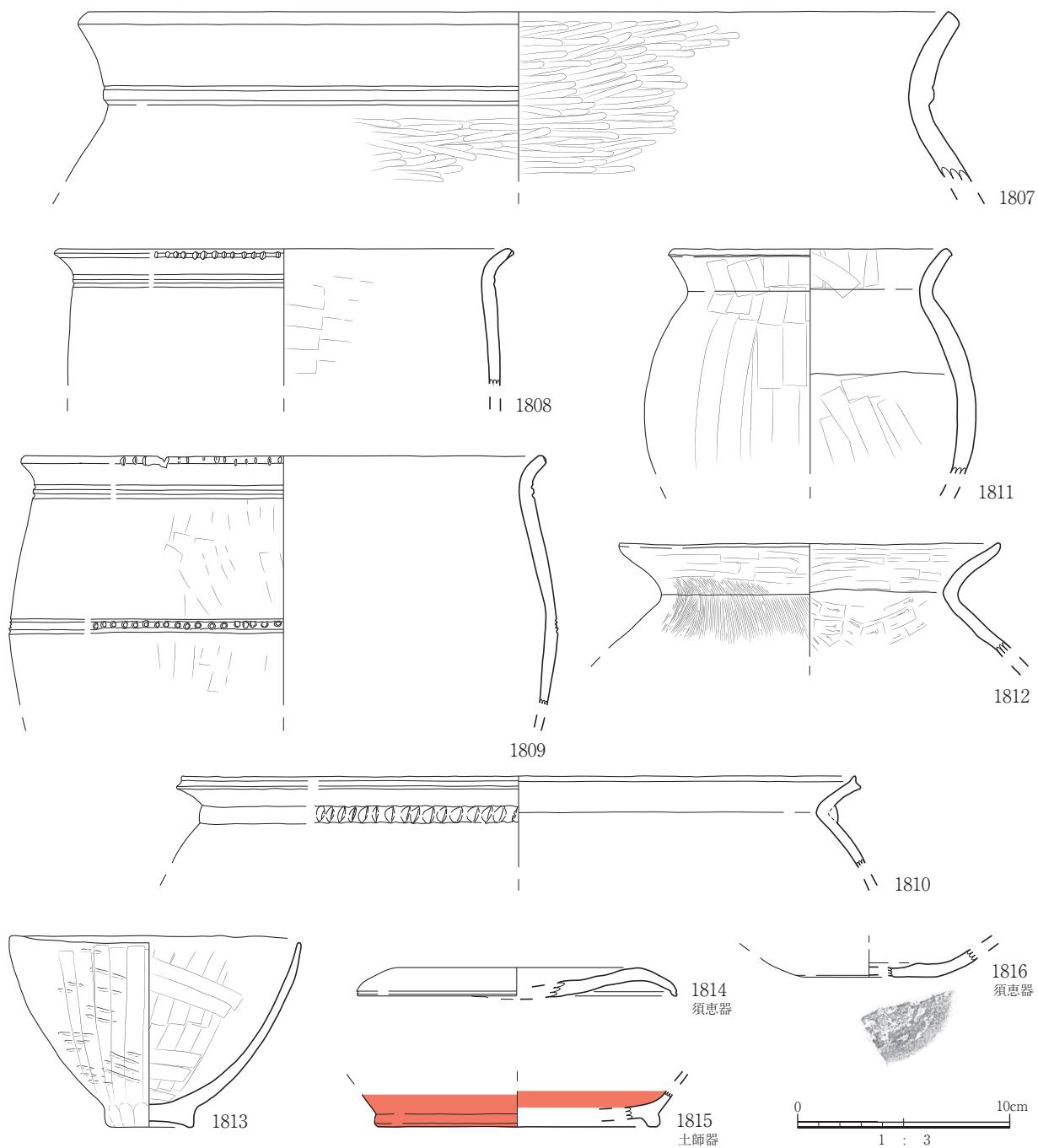


図477 SR27 出土遺物 1

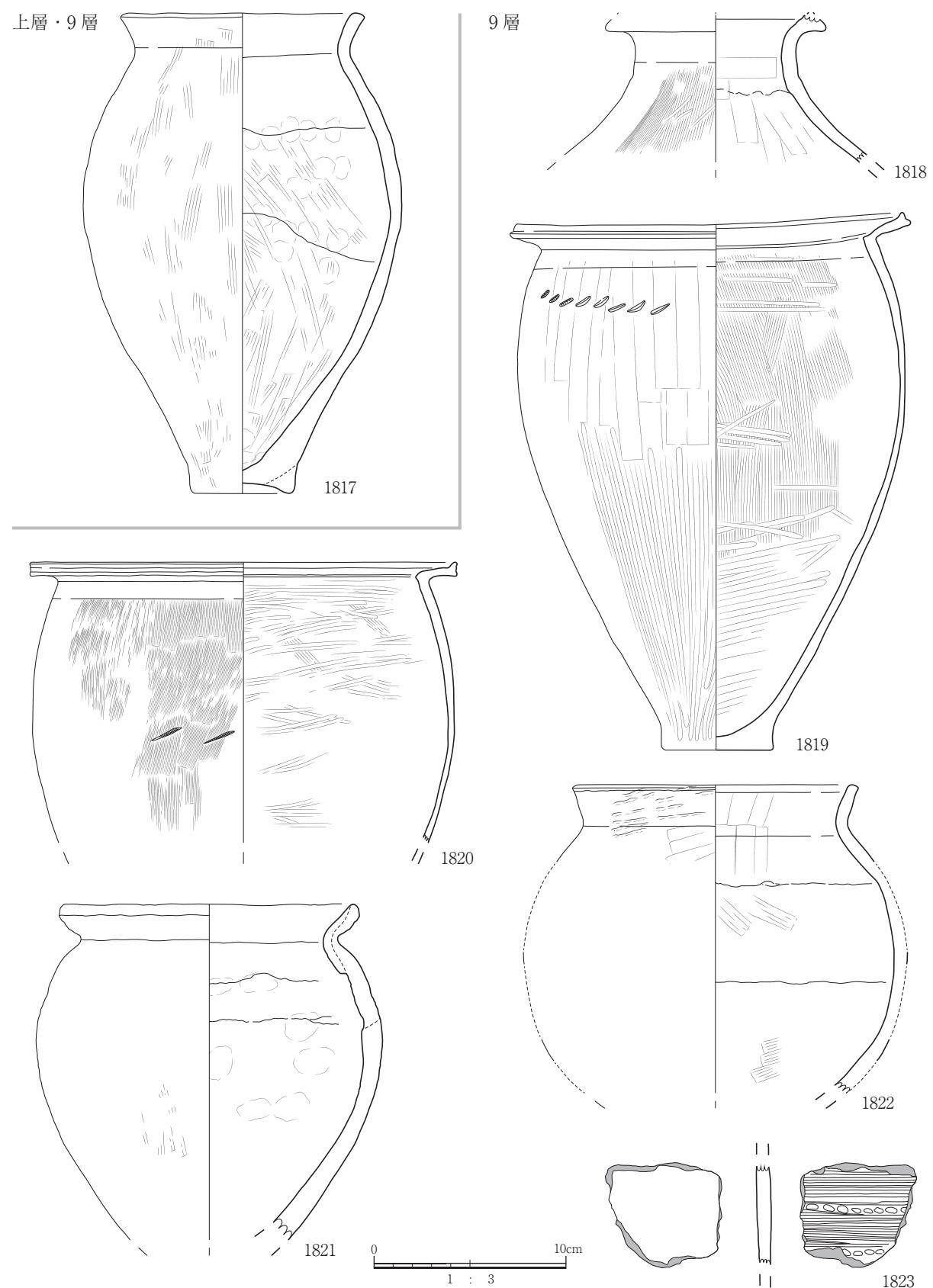
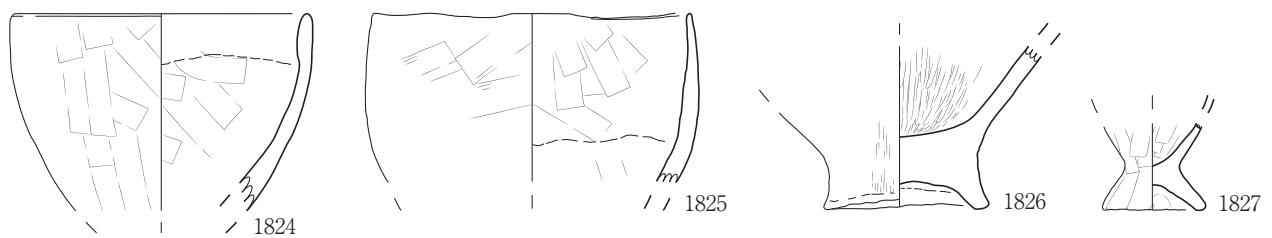
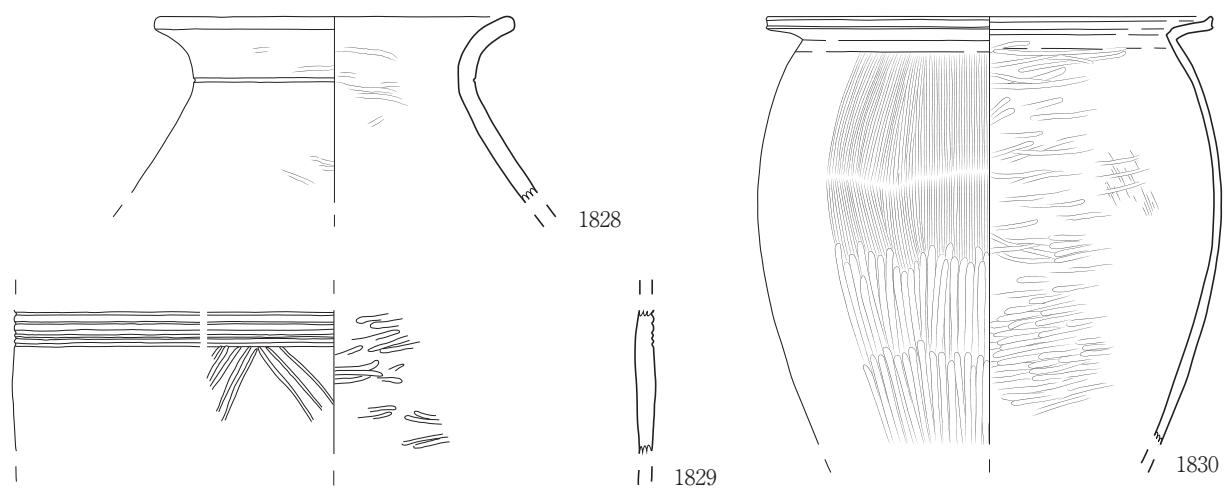


図478 SR27 出土遺物 2

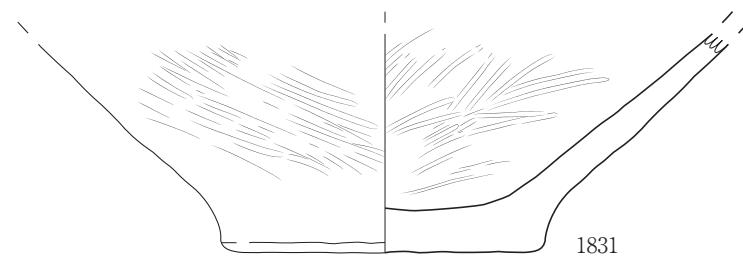
9層



トレンチ1



トレンチ2



トレンチ4

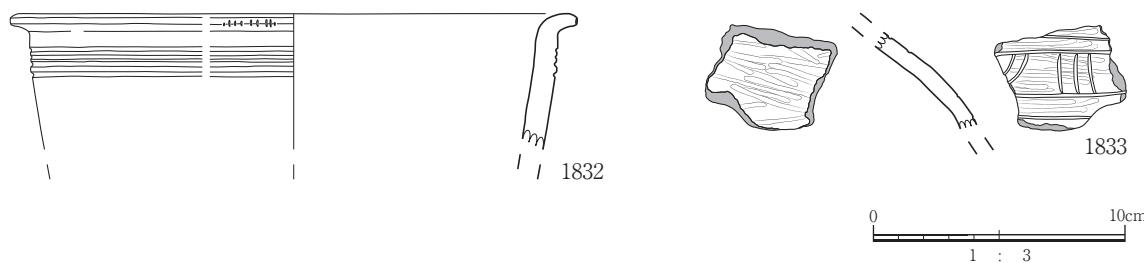


図479 SR27 出土遺物 3

トレンチ5

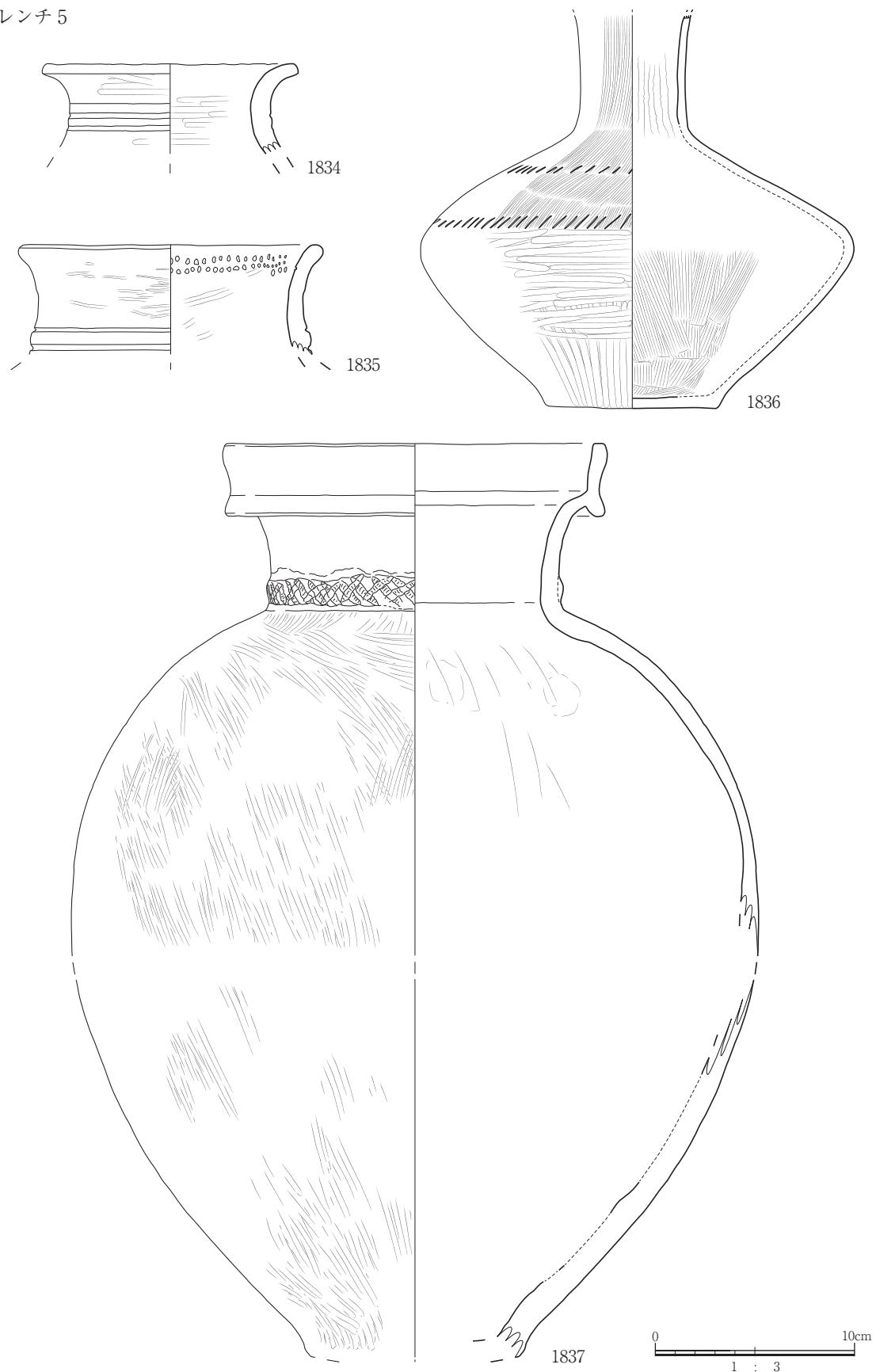


図480 SR27 出土遺物 4